23
2013. 5

薬友会報

千葉大学薬友会

薬学棟をバックに満開の桜

薬学棟脇の桜並木と病院

薬友会長・研究院長挨拶…… 2
医学薬学府・副学府長挨拶…… 2
退任のご挨拶…… 3
着任のご挨拶…… 3
新任のご挨拶…… 4
New Young Faculty Members…… 5
薬学部近況…… 6
受賞…… 8
研究室便り…… 9
クラス通信……15
ゐのはな山岳会・千葉大薬友会ゴルフ・サークル紹介……19
学部だより
教員の異動……21
薬学部・大学院医学薬学府入学者……21
薬剤師国家試験合格状況……21
卒業生・修了生の進路……21
博士学位授与一覧（甲号、乙号）…… 22
薬友会より……23
薬友会セミナー……24
編集後記……24

薬友会長・研究院長挨拶　荒野　泰

薬友会会員の皆さまにおかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。薬友会会長として２年目を迎えることとなりました。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年３月にご定年となりました生化学研究室の小林弘先生、千葉大学附属病院薬剤部長の北田光一先生のご後任として、それぞれ伊藤素行先生と石井伊都子先生が就任されました。昨年７月には、分子細胞生物学研究室の中山祐治准教授が京都薬科大学の教授として栄転されました。今年３月には、生物薬剤学の堀江利治先生とアイソトープ実験施設の熊谷宏先生がご定年となり、堀江利治先生のご後任には、伊藤晃成先生が赴任されました。本学を「卒業」なされました先生方の長きにわたります本学に対する多大なるご貢献に衷心より御礼を申し上げますと共に、これからのご健康とご多幸を祈念申し上げます。

平成24年度には、西田篤司教授を実施責任者とする大学間連携教育推進事業「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」が文部科学省から採択され、千葉科学大学薬学部および城西国際大学薬学部と協働して自主学習プログラムに基づく教育と実習を進めています。また、今年４月からは「医薬品情報学（マツモトキヨシHD)」寄附講座が開設され、その客員教授として山下純先生が着任されました。６年制教育のさらなる充実に貢献して頂けると確信しています。

一方、教育と研究活動の活性化・高度化による優れた人材の育成・輩出と研究成果の進展を目的として、リアルタイム生体分子相互作用解析システム、分子間プローブ顕微鏡システム、イメージングプレート単結晶Ｘ線構造解析装置、共焦点レーザー顕微鏡、高速液体クロマトグラフ/ガスクロマトグラフ質量分析装置を設置いたしました。これらの経費の一部として120周年基金の一部も充てさせて頂きましたことをご報告申し上げますと共に御礼申し上げます。

このように平成24年度は、４年制と６年制の両薬学教育に対する充実が図られましたが、本学に対する社会からの要請である「教育・研究の充実」をさらに推進する目的で、教職員が一丸となって努力する所存です。薬友会会員の皆さまのお力添えは何よりも心強いものであり、今後ともご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

医学薬学府・副学府長挨拶　山本　友子

満開の桜に迎えられ、亥鼻ヶ丘での３度目の年度がスタートしました。今年度からは医学薬学府・副学府長として、引き続き薬学系を担当させていただいております。薬学系の大学院生は、修士課程「総合薬品科学専攻」、後期３年博士課程「先端創薬科学専攻」、４年博士課程「先端医学薬学専攻」のいずれかに所属しています。後期３年博士課程は、平成24年度より定員を増やし、分子生命科学の視点に立脚した総合的な創薬研究と教育を行うことにより、関連研究分野の中核となりうるより多くの人材を育成することを目指しています。４年博士課程の中で薬学系では、臨床研究やトランスレーショナルリサーチを遂行する能力をもつPharmacist Scientistの育成を目指しています。医学薬学府全体では、修士課程（233名)、後期３年博士課程（69名)、４年博士課程（665名）を擁し、最先端の生命科学・創薬科学分野および高度な医療科学分野での研究・教育活動を推進し、薬学・医学の未来を担う人材の育成に当たっております。

学府では国際的な環境でリーダーシップを発揮できる有能な人材の育成に力を注いでいます。その一端を紹介しますと、これまで英語による講義・セミナー・研究発表や海外留学、大学院生Exchange Program による短期海外研修等を推進してきました。昨年度はShort Stay/Short Visit Programによりタイの４大学（シラパコーン大学・チュラロンコン大学・マヒドン大学・チェンマイ大学）へ５名、韓国ソウル大学へ１名の大学院生を派遣、タイから５名、中国瀋陽薬科大学から２名の大学院生を受け入れて、大学院生が「よりグローバルに」の認識を深めるよう取り組んでいます。又、昨年12月にはタイのシラパコーン大学とのダブルディグリー協定を締結し、研究教育の国際展開を図っております。

さらに学府では様々な特色ある教育プログラムを推進しています。平成24年度秋に採択された文部科学省博士課程教育リーディングプログラム「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム」は、新規治療薬の開発を含む「治療学」の推進、「豊かな国際性」と「より実践的な研究開発推進能力」や「幅広い知識に裏付けされた総合的判断能力」を身につけたリーダーの養成を目指していますが、本年度は薬学系から３名の４年博士課程大学生がこのプログラムに参加しています。

薬学部・大学院共に「亥鼻の地の利」を得て着実に発展しております。引き続き会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

思い出に溢れる千葉大学での生活　　堀江　利治

本年３月をもちまして、千葉大学を定年退職いたしました。平成６年１月に千葉大学教授として薬学部に着任し、生物薬剤学研究室を担当して20年近くの時が経過しました。とても長い年月のようでもあり、また過ぎてみるとついこの間千葉大学に着任したばかりであるような気もいたします。多くの皆様方からのご指導・ご支援を頂き、無事に千葉大学での教育・研究生活に幕を引くことができましたことを心より感謝いたしております。

西千葉キャンパスでは校舎、薬用植物園、百周年記念館、と緑に囲まれた親しみのある落ち着いた環境で充実した10年間を過しました。平成16年には生物薬剤学研究室は亥鼻キャンパスに新営された医薬系総合研究棟Ｉに移転し、外観も内部も充実した近代的な研究棟にて千葉大学での教育・研究生活の後半、約10年を過ごすことができました。静かで、落ち着きがあり、じっくりと物事に取り組める環境でした。このような良き環境で過ごすことができましたことを深く感謝いたしております。一昨年には西千葉と亥鼻に分断されていた薬学部が亥鼻キャンパスに完全に統一され、望ましい体制で名実ともに機能し始めていることを実感いたしました。大学院薬学研究院、そして医学と薬学の融合した大学院医学薬学府の設置という大きな組織改革もありました。その後の目覚ましい発展をみるとき、この改革の先見性、薬学部の実行力を強く感じたものでした。そして、国立大学の法人化、さらには薬学教育６年制という薬学教育制度の大改革がありました。それまであまり想像していないような大きな時代の変遷でした。こういった難しい状況にも薬学部は力を合わせて対応し、望ましい展開をしてきたという印象を強く受けています。その背景には、千葉大学薬学部の長い歴史の中で培われてきた伝統があることは言うまでもないことと思います。私が着任したときの最初に受けた薬学部の印象は、伝統と誠実さ、実行力でした。千葉大学で過ごした約20年の間もこの印象は変わることはなく、その素晴らしい伝統に支えられた薬学部の大きさをいつも強く感じてきましたし、今も同じ思いです。

千葉大学在職中、大変充実した教員生活を送ることができました。長い間、大変お世話になり、どうもありがとうございました。千葉大学薬学部の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

着任のご挨拶　　伊藤　素行

平成24年５月１日付けで千葉大学大学院薬学研究院　生化学教授を拝命いたしました。生化学研究室は、昭和26年、薬学部発足当初から存在する伝統ある研究室です。初代　湊顕教授、廣瀬聖雄教授、小林弘教授に引き続き、４代目として担当させていただくことになります。伝統研究室の名に恥じぬよう常に精進していきたいと思っております。

私は、大阪大学大学院薬学修士課程（薬化学：今西武研究室、現：生物有機化学分野）を修了後、大日本製薬（現：大日本住友製薬）に入社しましたが、生命科学研究に取り組みたいという思いから、平野俊夫先生（医学部、現：大阪大学総長）の研究室の博士課程に進学しました。そこで、分子生物学、生化学、ノックアウトマウス作製など生命科学の研究手法を学び、免疫応答や個体発生に関わるシグナルタンパク質の研究を行いました。博士課程卒業後、大学院時代に携わったシグナル伝達や個体発生研究をさらに発展させたいと考え、当時、モデル動物としては新参であったゼブラフィッシュに着目しました。ゼブラフィッシュは、遺伝学手法を使った新規遺伝子ハンティングや器官形成解析に優れたモデルです。博士研究員として米国国立衛生研究所（NIH）傘下の国立小児保健・人間発達研究所（NICHD）にて、ゼブラフィッシュをモデルとして、初期神経形成にかかわる、iroquois, Tcfなどの転写因子、Notchシグナルの新規制御因子であるMibユビキチン化酵素の研究を行いました。平成15年に帰国し、名古屋大学大学院理学研究科にて特任准教授、准教授として細胞シグナル伝達制御による個体の器官形成の分子基盤についての研究を進めてきました。千葉大学薬学研究院では、これまでの研究手法をさらに発展させ、個体内での細胞移動や細胞系譜のイメージング、哺乳類培養細胞を用いたNotchシグナルのハイスループット活性測定、高活性リガンドタンパク質の創出などを通じて、細胞間シグナルの “生理機能～分子メカニズム解析～人為的操作” の統合的研究を行いたいと考えています。

これまで、私は薬学部卒業後、医学部、理学部と異動し、薬学部には卒業以来約20年ぶりに戻ってきたことになります。この20年の間に６年制の導入など薬学部にも大きな変革がありました。しかしながら、昨今のiPS細胞革命のように、生命科学分野での基礎研究の重要性はますます高まっています。私は、生化学研究室の責務は、基礎研究ならびに世界で活躍する生命科学研究者の育成であると思っています。今後、この目標に向けて研究・教育に邁進致しますので、千葉大学薬友会員の皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ゼブラフィッシュアダルト（約３cm）
と受精後１日胚（約１mm）

着任のご挨拶　伊藤　晃成

このたび平成25年１月１日付けで生物薬剤学研究室に着任しました。平成12年３月に東京大学で博士（薬学）取得後、５年間前任の堀江利治教授（現・帝京平成大学教授/千葉大学名誉教授）のもとで助手･助教を、その後約８年間は東大病院薬剤部で准教授・副部長をしておりましたが、堀江先生ご在職中に着任させていただくことができ、つい先日の退職行事等にも直接的に関われたことを大変嬉しく思っています。私が助手だった頃はまだ薬学部が西千葉にあり、春には恒例の新入生歓迎バーベキューのようなものがありました。助手で赴任早々に、新入生相手に教授の先生方と庭で一日中焼きそばを焼いていた記憶があり、学生と職員、そして職員同士の隔たりのない非常に働きやすい環境というのが千葉大薬学部に対する私の第一印象でした。８年ぶりに千葉大に戻った今、キャンパスは違えども学生・職員の方々と接して感じる雰囲気は当時のままで、大変懐かしい思いがします。

前職場の東大病院では臨床業務、医学・薬学生に対する卒前実習、院内の各種会議、薬事・治験審査等々を通して、患者・他職種・製薬企業など複数の立場からの考え方に接することができました。同時に、薬そのものに関わる問題、使い方に関わる問題が多くあり、その解決には薬学の力、特に自らが研究を主体的に行った経験のある人材が必要だということもあらためて感じました。薬学部では４年制と６年制にコースが分かれた今もなお、研究室配属を通じ、全ての学生に対し数年間の自主的な研究活動を重んじています。ここではテーマ設定、問題抽出、仮説を検証するための実験、結果（失敗）に基づく考察、日々のプレゼンテーションと質疑応答の方法までを徹底的に学ぶことができ、たとえ成果が世に出なくても、これら経験が自らを大きく成長させ、創薬・臨床の場はもちろん、それ以外の職に就いたとしてもきっと役に立つ知恵と忍耐力が身につくはずです。研究に無心で没頭できるのは、学生でいられる時期が最後かもしれません。学生の特権を無駄にすることのないよう、そして学生自らこれに気づかせるのも教員の重要な役割だと思っています。私の専門は薬物動態学で、薬の効果・毒性を考える上での基盤となる血中濃度や薬物暴露の問題を扱っています。学生・教職員の皆様方とは日々の講義・共同研究、その他の社会活動を通して幅広いお付き合いをできればと考えていますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

新任のご挨拶　石井伊都子

平成24年９月１日付けで、千葉大学医学部附属病院薬剤部に赴任致しました。また、薬学研究院病院薬学研究室も兼務し、薬学部生の教育や研究に携わる機会を頂きました。

平成18年度より薬学部６年制が導入され、既に一期生は社会で活躍しております。薬学部の新制度は、疲弊している日本の医療の改革の一端であり、薬剤師には多くの期待が寄せられています。事実、私が着任してからほんの数ヶ月の間でも、病院内で活躍する薬剤師へのニーズとそれがもたらす患者さんへの利益が手に取るようにわかりました。病棟での患者さんへの薬剤管理指導はもとより、病棟スタッフへの処方提案や情報提供、病棟における医薬品の適正管理が強く求められ、既に薬剤師は病棟で活躍する職種であると認識されています。当院薬剤部でも、一部の診療科ではカンファレンスに参加する、医師と薬剤師が同席して処方を行う協同処方入力を実施する、病棟で処方鑑査や注射薬の調製を行う等、薬剤師が病棟で活動しております。

薬剤師が病棟で活躍すると同時に、薬剤師にはこれまで以上に薬学的知識、情報処理能力やコミュニケーション力が求められています。薬剤師の仕事＝膨大な知識の集積と思われがちでしたが、これからの薬剤師には「考える力」が必要です。同じ病名を持つ患者さんでも、その身体的・精神的・社会的背景が異なるため、求められる治療やケアが異なります。薬剤師も患者を支える医療チームのメンバーとして、同じ土俵でディスカッションをしていかなくてはなりません。そのためには、適切な情報を用いて熟考しなくてはなりません。特に、薬剤師は医療現場の中で「化学的に観る」視点を持つ立場ですので、在学中にその視野を養うためのトレーニングが必要となります。それには、研究が最も良い教育ツールであり、定性的および定量的観念が身に付くと考えます。私は、医療現場でのニーズを薬学部生や大学院生に伝え、教育や研究を通して彼らの考える力の育成のために最善を尽くしていきたいと考えております。

最後になりましたが、千葉大学薬友会の皆様のご多幸を祈るとともに、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

新任のご挨拶　山下　純

平成25年４月１日付で千葉大学大学院薬学研究院医薬品情報学寄付講座に就任いたしました。客員教授に任命され光栄に思うと同時に、いただいた機会を十分に活かして近年の科学的調査研究や情報に基づいた薬学教育に、医薬品情報学という切り口から貢献したいと考えております。

医薬品情報学は、私たちが医薬品情報を提供する専門家としての本分を全うすべく、どのように医薬品情報を創出、収集、伝達、評価、活用すべきかについて幅広く調査研究を行う分野であります。新しい学問ではありませんが、近年の高齢化社会への急速な移行や皆保険制度の弱体化にともない推進されているセルフメディケーションに見られるように、特に医薬品の適正使用におけるこの研究分野の重要性が認識されてきています。

薬学教育が６年制となり学生は、即戦力として現場に精通した総合的な知識と技能を修得することが求められています。薬剤師に求められているものは多岐にわたります。新しい治療方法や新薬の開発とともに追加され新しくなる薬物治療の専門知識、副作用情報や臨床試験結果などを正しく理解するための科学的思考能力（特に統計的知識）、または現場に直結した医薬看連携のチーム医療における適切な役割の理解などです。薬物治療には必ず副作用の可能性があると認識し、過誤防止や併用禁忌に細心の注意を払いながらの毎日の調剤・監査・服薬指導の業務に加えて、絶えず患者さんを見て情報収集をしていく姿勢を学生たちに伝えていくことが、大学教育の使命と考えます。

病院薬剤師・調剤薬局薬剤師としてあるいは公衆衛生学（疫学および生物統計学）の知識をもつ災害精神衛生学研究者としての私の経験は特異と考えております。必ずしも薬学の知識を持たない在宅医療従事者への医薬品情報提供や教育をどうすべきか、収集した医薬品の副作用情報や臨床試験結果を疫学的あるいは統計学的にどう評価するか、また電子薬歴などが使用不可となった災害時に医薬品情報提供をどう行うかなどの議論に、私の経験および知識を生かせると考えます。

医薬品情報学講座として、医薬品適正使用のための医薬品情報業務の系統的調査研究に加えて、特に社会との接触をもち、薬剤師生涯教育や講演会やシンポジウムの定期的開催も行えればと考えます。今後とも薬友会会員の皆様のご指導ご鞭撻、ご後援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。亥鼻の方面にお越しの際は是非お立ち寄りください。

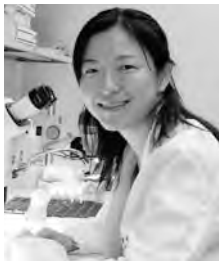
New Young Faculty Members

着任のご挨拶　溝口　貴正

平成24年10月１日付けで、薬学研究院生化学研究室の助教として着任いたしました、溝口貴正と申します。ゼブラフィッシュという熱帯魚を使って脊椎動物の形態形成や細胞分化に興味を持って研究をしています。現在は細胞が隣接する細胞と接着を保ったまま移動する"細胞集団移動"と呼ばれる現象に焦点を当てて解析を進めています。この現象は脊椎動物の臓器形成、血管形成、ガンの浸潤などで見られる普遍的な現象であり、現在進めている研究成果が将来的に治療や創薬の足がかりになればと考えています。

現在、亥鼻キャンパスの近くに住んでおります。近くに大きな公園があり、散歩するのが日課になっている私としては非常に住みやすい場所で研究をさせていただけるのを幸いに感じております。若輩者故、至らぬ点多々ありますが、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

着任のご挨拶　殿城亜矢子



三年半にわたる米国スクリプス研究所フロリダでの留学生活を終え、平成24年10月１日付けで千葉大学大学院薬学研究院生化学に助教として赴任いたしました殿城（とのき）亜矢子です。私は大学院生の時分より現在までモデル生物としてショウジョウバエを用いて、老化にともなう生体内の変化について研究を行ってきました。ショウジョウバエは台所に発生するような小さなハエですが、年を取るにつれて活動の低下、睡眠時間の変化、記憶の低下などの加齢変化を示します。小さいハエを用いた老化研究が、超高齢化社会を迎えた我が国における高齢者医療の発展に学問的貢献ができるように、学生や教職員の先生方と協力して全力を尽くしていきたいと思います。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

着任のご挨拶　山口　憲孝

昨年12月１日付けで分子細胞生物学研究室の助教に着任いたしました山口憲孝です。東大薬にて学位を取得した後、東大医科研にて癌細胞内のシグナル伝達について研究を行ってきました。特に着目していたのはNF-κBシグナル伝達系で、この伝達系の活性化を制御するユビキチンリガーゼの機能解析を中心に研究を進めてきました。今後、分子細胞生物学研究室ではチロシンキナーゼの新たな役割や制御機構の解析を行っていく予定です。これまでの研究で得た知識や経験を生かしてチロシンリン酸化の新たな局面を見いだし、将来的には癌や炎症などの治療に役立つ研究成果を上げたいと思っています。また、研究所から薬学の世界へ戻って参りましたので、これからは薬学教育にもお力添えさせていただきたいと思っています。６年制へと進化した薬学教育について学べることが楽しみでもあります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶　大久保正人

４月１日付で薬学研究院実務薬学研究室に助教として着任致しました。私はこれまで、医学部附属病院の薬剤師として勤務し、調剤や入院患者への服薬指導を行いながら、緩和ケア支援チームや災害派遣医療チーム(DMAT)の一員として多職種連携の業務に参画してまいりました。医療現場で薬剤師が関わる領域は近年急速に拡大し、正確な医薬品の供給から、患者中心の医療を提供する業務に比重がシフトしています。薬剤師業務の多様化が進む中で、実務家教員として、学生にはただ単に既存の業務を伝えるだけでなく、医療現場の問題点の抽出と解決策を見出す力を養成したいと思います。さらには、ケア提供者としての薬剤師にとどまらず、研究者あるいはリーダーたる薬剤師の礎を築けるように、邁進して参りたいと思います。皆様には、ご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

薬　学　部　近　況

秋入学の導入

グローバル化が加速される現代において、多様な人材を受入れることは大学を活性化するために重要です。千葉大学では文部科学省グローバル人材育成推進事業（全学型）が採択され、大学院のみならず学部においても一層のグローバル化を推進しているところです。既に、大学院医学薬学府（薬学領域）では、10月入学を行ないグローバルな人材に広く門戸を解放しています。

そこで学部においても、豊かな国際感覚を身につけた、創薬科学を目指す学生を受入れるために、本年から薬科学科（４年制）に限定した帰国子女入試を行います。７月６日、７日に試験を行い、合格者は９月に入学します。優秀であれば３年半で早期卒業し大学院に進学できます。秋入学の導入により、医薬品創製や生命科学に従事するグローバルな研究者の育成を一層加速して行きますので、皆さまのご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

（山口　直人）

国際交流の現況

ダブルディグリー協定調印式
（平成24年12月24日）

薬学部では1990年代はじめから国際交流が本格化し、タイ、中国、マレーシアなどアジアを中心に多くの留学生を迎え入れてきました。特にチュラロンコーン大学をはじめとするタイ国立大学薬学部とは関係が深く、教員・学生の交流が今も盛んです。更に２年前から始まった日本学生支援機構が主催する「ショートステイ・ショートビジットプログラム」の支援により、16名の留学生がタイのみならず韓国、中国の薬系大学から来日し、また20名の本学大学院生、学部生が相手校に短期留学するなどして交流の機会を広げています。この留学生の中から、昨年度博士課程への進学者を得たことは望外の喜びでした。また過去の密接な教育・研究交流を基盤に、タイのシルパコーン大学薬学部と「博士ダブルディグリー」協定を薬学研究院として初めて締結しました。一方、昨年度から始まった文部科学省主催の「グローバル人材育成推進事業」に、国立大学４校の一つとして千葉大学が採択されたことを機に、薬学部・薬学研究院でも更なる協定校の開拓、教育･研究の交流を通じて人財育成を推進することが決定しています。今後益々のご支援･ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

（戸井田敏彦）

微笑みの国で学んだこと

千葉大学大学院　医学薬学府　製剤工学研究室　修士二年　長谷川友紀

私は2012年８月より５週間、SSSVプログラムを利用し、交換留学生としてタイ王国に滞在しました。現地ではSilpakorn大学薬学部製剤工学科にお世話になり、Virgin coconut oilを用いたエマルションと銀ナノ微粒子とを組み合わせた新規抗菌製剤の開発研究に加わりました。実験セミナーでは日本及び現地での研究内容を発表する場を頂き、化粧品学及び国際クラスの実習ではアイシャドウや口紅作り、ならびに英語でのディベートに参加しました。日本での研究とは異なるテーマに携わることで視野が広がり柔軟な考え方が養われたと共に、現地の学生の学習意識や英語力の高さに大きな刺激を受けました。また、学生が調製した手指消毒用ジェルを地域の小学校へ寄付する活動は、特に印象的な経験のひとつです。文化の面においても、小学生に交じって習った伝統舞踊やムエタイ、訪れた様々な寺院・水上市場から普段の食生活まで、毎日が発見の連続でした。英語でのコミュニケーションは苦労することもありましたが、伝えようとする・理解しようとする姿勢が磨かれ、一生大切にしたい多くの友人を得ました。最後に、留学の機会を与え、支えてくださった全ての皆様に深く感謝申し上げます。

研究室の学生達と。
中央、着席しているのが筆者。

新しい薬剤師教育がスタート

事業推進責任者　千葉大学薬学研究院教授　西田　篤司

平成24年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業に千葉大学薬学部が代表校となり城西国際大学薬学部、千葉科学大学薬学部との協同により申請した「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」が採択されました。

本プログラムは、千葉県下三大学が連携し、社会からのより高度な要請に応えることのできる薬剤師を養成する５年間の取組みです。現在、薬剤師の関与が強く望まれている職務である Ａ）放射性医薬品調製・管理業務、Ｂ）病棟活動における専門職連携、Ｃ）救急災害時医療活動、Ｄ）在宅医療での薬剤管理指導、Ｅ）違法薬物、医薬品適正使用、ドーピングの知識普及・啓発活動について、アクティブ・ラーニングを取り入れた実践社会薬学教育プログラムを三大学が協働して作成します。Ａ～Ｅの５プログラムに11クラスの授業が、それぞれ演習１単位として開講され、５単位以上を習得した学生には、「連携実践社会薬学コース」修了が認定されます。基礎学習をインターネットにて提供されるＥ―ラーニングで学び、実践的な演習を週末や長期休暇中に実施することも授業の特徴の一つであり、年間50人程度、毎年継続して養成する予定であります。

本プログラムを通じて薬が関わる社会問題や地域医療問題の解決に積極的に関わる薬剤師が育成されることを期待しています。

千葉大学薬学部創立120周年記念事業寄附金賛同者芳名簿

千葉大学薬学部創立120周年記念事業会では、「千葉大学薬学部創立120周年記念事業寄附金賛同者芳名簿」を作製し、平成21年10月26日から平成24年７月31日までの間に、ご寄附いただきました個人、法人等の方々のご氏名等（816件）を受付順に掲載しました。本芳名簿は、金庫に入れ、薬学研究院長室に保管して、皆様のご厚意を末永く記録にとどめ置きたいと存じます。改めまして、ご支援いただきました会員等の皆様に心からお礼申し上げます。

（石川勉事業会代表）

寄付者名簿写真

寄附講座「医薬品情報学（マツモトキヨシホールディングス）」設置される

平成25年４月１日より、山下　純客員教授、高橋由佳客員助教、マツモトキヨシホールディングスからの客員研究員２名で構成されます上記寄附講座が薬学研究院に開講いたしました。当面の設置期間は平成28年３月末までの３年間です。本講座では、保険薬局を取り巻く状況の変化に対応すべく、臨床現場から得られる情報の収集・評価・解析・再構築・標準化を実施し、その成果を臨床現場へ還元することを目的としています。本講座の設置により、薬剤師の新たな職能の創設、保険薬局と病院薬局や大学間との連携が強化され、医薬品の安心・安全使用の促進や地域社会との連携や協調に大きく貢献することが期待されます。

（荒野　　泰）

受賞（平成23年３月～平成24年12月）

学会賞

平成23年３月	日本薬学会賞（日本薬学会）　濱田康正（薬化学）
平成23年９月	日本植物細胞分子生物学会学術賞（日本植物細胞分子生物学会）斉藤和季（遺伝子資源応用）
平成23年９月	シクロデキストリン学会賞（シクロデキストリン学会）山本恵司(製剤工学)
平成23年９月	日本細菌学会浅川賞（日本細菌学会）山本友子（微生物薬品化学）
平成23年10月	学術貢献賞（日本医療薬学会）有吉範高（病院薬学）
平成24年11月	住木・梅澤記念賞（日本感染症医薬品協会）石橋正己（活性構造化学）
平成24年11月	日本薬物動態学会学会賞（日本薬物動態学会）千葉　寛（薬物学）

論文賞等

平成23年４月	Best Presentation Award Predoctoral Research Third Place（4th Asia-Pacific regional ISSX meeting）長井美樹（薬物学）
平成23年５月	永井財団学部学生七つ星薬師奨励賞（日本薬剤学会）萩原由実（製剤工学）
平成23年７月	最優秀ポスター発表賞（植物代謝工学に関するゴードンリサーチカンファレンス）Somnuk Bunsupa（遺伝子資源応用）
平成23年７月	ファイザー賞受賞（日本トキシコロジー学会）上野光一（高齢者薬剤学）
平成23年９月	年会賞（第18回日本免疫毒性学会学術大会）山浦克典（高齢者薬剤学）
平成23年９月	学生・若手優秀発表賞（第18回日本免疫毒性学会学術大会）諏訪映里子（高齢者薬剤学）
平成23年９月	鈴木紘一メモリアル賞（日本生化学会大会）内田雅士（病院薬学）
平成23年10月	ベストプレゼンテーション賞（第93回日本細菌学会関東支部総会）原　貴史（微生物薬品化学）
平成24年３月	学生優秀発表賞　（日本薬学会第132年会）原田真也（生体機能性分子）、中山淳（生体機能性分子）、安部美南子（生体機能性分子）、鈴木千恵（分子画像）、鈴木梨菜(高齢者薬剤学)、石渡万希子（高齢者薬剤学）、柳原碧（高齢者薬剤学）、岡本 彩（分子細胞）、三浦崇仁（分子細胞）、三嶋雄太(分子細胞)、盛永敬郎　（分子細胞）、大高遵平（薬化学）、鈴木雄太（薬化学）、福原千津(臨床教育)、城克己（臨床教育）、植村健二（活性構造化学）、皆川朋皓（活性構造化学）、内田雅士（病院薬学）、松本准（病院薬学）、橋本真里（薬物学）、稲葉明日実（薬物学）、牧島隆史（製剤工学）
平成24年６月	学生優秀発表賞　（第13回Pharmaco-Hematologyシンポジウム 日本薬学会生物系部会）　三嶋雄太（分子細胞）
平成24年７月	第2回2012年度ファイザー賞　（日本毒性学会）山浦克典　（高齢者薬剤学）
平成24年９月	ベストポスター賞　（シクロデキストリン学会）並木祥恵（製剤工学）
平成24年10月	優秀研究発表賞（第56回日本薬学会関東支部大会）佐藤 友美　（高齢者薬剤学）
平成24年10月	優秀発表賞（第56回日本薬学会関東支部大会）清水千聖（実務薬学）
平成24年12月	最優秀賞（第5回企業に研究開発してほしい未来の夢アイデア・コンテスト）富岡貴久　（分子細胞）
平成24年12月	Asian Core Program Lectureship Award受　賞（7th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia）荒井緑（活性構造化学）

その他

平成23年４月	千葉大学なのはなコンペ2011（教員版）福本泰典（分子細胞）
平成24年４月	千葉大学なのはなコンペ2012（学生版）岸田聡（薬物学）
平成24年10月	平成24年度科研費審査委員賞（日本学術振興会）石川勉（製造）
平成24年10月	平成24年度科研費審査委員賞（日本学術振興会）根矢三郎（薬品物理化学）
平成24年12月	千葉大学なのはなコンペ2013（学生版）小柳津和音（活性構造化学）

平成24年秋の叙勲で坂井進一郎千葉大学名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。坂井進一郎先生は昭和35年に千葉大学に助教授として赴任され、その後昭和37年より平成７年まで33年間にわたり教授として薬化学研究室を主宰され、平成７年に名誉教授となられました。その間、薬学研究の発展と人材育成にご尽力され、数多くの卒業生、修了生を送り出しました。また、薬学部長、評議員、千葉大学分析センターの設立と同センター長を歴任され、薬学部、大学の発展に大きく貢献されました。

研　究　室　便　り

薬品物理化学

みなさま、お元気でしょうか。平成25年４月現在、本研究室には根矢三郎（教授）・星野忠次（准教授）・鈴木優章（助教）の職員と、博士課程学生２名、修士課程または５，６年生５名、４年生３名、研究生１名の総勢14名が在籍しています。亥鼻地区の薬学部第二期棟６階に移転して１年以上過ぎましたが、新環境にすっかり慣れて全員活発に活動しています。

研究室では、根矢教授と星野准教授がそれぞれのテーマで進める両輪体制をとっています。根矢教授らは生物無機化学やヘム化合物の物理化学的研究を進めており、最近ではBiochmeistry, Inorg. Chem.などに論文発表をしました。星野准教授らは計算化学などの手法を駆使して、J. Phys. Chem., Bioorg. Med. Chem.などにタンパク質と薬物の相互作用について成果を出しています。

本年３月には、博士課程３年のMd. Iqbal Mahmood氏が博士課程を修了して博士（薬学）の学位を取得しました。また、根矢教授は昨年10月に「科研費」の優秀審査員として、日本学術振興会から表彰されました。みなさま、晴れた日には富士山や筑波山が一望できる本研究室にぜひ一度お立ち寄りください。

遺伝子資源応用

本年度の研究室は、教員３名（斉藤和季教授、山崎真巳准教授、吉本尚子助教）、博士研究員２名、大学院生５名（博士後期課程２名、博士前期課程３名）、学部生12名、技術職員１名、事務職員１名の計24名で構成されています。このうち４名がタイ、中国、マレーシアからの留学生であり、国際色豊かです。私達は植物が生産する多様な天然化合物の生合成に着目し、有用代謝産物の生産と制御の分子機構の解明と有用形質を示す植物の作出をテーマに掲げて研究を行っています。亥鼻の新棟での研究活動も軌道に乗り、昨年も多くの興味深い知見を見いだしました。昨年の大きな出来事として、日本生薬学会第59回年会を主催し、幸いにも600名を超える参加者に恵まれました。研究室員は研究成果を発表し、参加者と熱い議論を交わしました。また、夏の薬学部ソフトボール大会は、薬品物理化学研究室との合同チームで参加し、大いに盛り上がりました。普段は研究室員同士で研究に関する議論や情報交換を活発に行い、励まし競い合って研究を進めています。今年度も皆で研究に励んでいきますので、薬友会の皆様の温かいご支援をお願い申し上げます。

分子細胞生物学

現在、山口直人（教授）、福本泰典（講師）、山口憲孝（助教）に加え、14名の院生（４年博士11名、修士３名）と10名の学部生で構成され、がん細胞のシグナル伝達機構の解析を行なっています。特に、チロシンキナーゼの細胞内トラフィックとクロマチンダイナミクス・細胞分裂・DNA傷害・細胞周期チェックポイントにおける核内チロシンリン酸化に関する分野を開拓して、創薬を目指した基盤研究を行なっています。

この一年の出来事として、中山祐治先生が７月より京都薬科大学教授（生化学）に就任し、福本泰典先生が８月から講師に昇任し、山口憲孝先生が12月よりテニュア・トラック助教として就任しました。また、岡本彩さん、三嶋雄太君、三浦崇仁君、盛永敬郎君が第132回日本薬学会年会の学生優秀発表賞を受賞し、三嶋雄太君は第13回Pharmaco-Hematologyシンポジウムの学生優秀発表賞も受賞しました。更に、富岡貴久君が、日本経済新聞社主催テクノルネサンスジャパン 第５回「企業に研究開発してほしい未来の夢アイデア・コンテスト」で最優秀賞を受賞しました。

今後とも、薬友会の皆様のご支援ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

国立環境研究所

環境リスク研究室（平野研）は、つくば市の国立環境研究所にある健康リスク/NanoToxicology研究室を兼ねています。 現在、博士課程１名、修士課程１名が在籍し、ポスドクフェローの他、EUとの共同研究員が多く在籍しています。

研究テーマは、

1．ヒ素やセレンなど半金属の代謝機構と生体影響機序の解明
2．カーボンナノチューブ、銀粒子などナノマテリアルの毒性発現機構の解明
3．二次生成粒子・PM2.5の生体影響

と多岐にわたっていますが、全体を通して環境有害物質との生体側とのインタラクションに伴う変化を培養細胞や実験動物を用いることにより捉え、環境中の様々な物質が生体に作用するメカニズムの解明を目指しています。そのための手段として、プラズマ質量分析器などの高感度化学形態分析、共焦点レーザー顕微鏡、原子間力顕微鏡、フローサイトメーター、遺伝子導入など様々な手法を用いています。

環境リスク研究室（青木研）は、国立環境研究所環境リスク研究センター・環境リスク研究推進室を兼ねています。現在、研究室には千葉大大学院の学生は在籍していませんが、多くの研究者やポスドクフェロー・学生が研究に参加しています。

中心となる研究テーマは、

1．遺伝子導入動物（マウス、ゼブラフィッシュ）を用いた多環芳香族炭化水素類などの環境化学物質が動物体内で示す変異原性の発現機構の解明
2．環境化学物質の健康リスク評価手法の開発

ですが、環境水中の化学物質の生態毒性の解明と評価手法の開発についても、多くの共同研究を進めています。研究室全体としては、分子生物学や分子毒性学に基盤をおいた環境化学物質の毒性発現機構の解明から、数理モデル解析による定量的リスク評価手法の開発まで、環境リスク評価に関連した幅広い研究を進めています。また、環境化学物質の複合曝露によるリスクの評価など、環境施策に関わる調査や研究を行っていることも研究室の大きな特徴です。

かずさDNA研究所（遺伝子創薬連携講座）

遺伝子創薬研究室は、かずさDNA研究所との連携講座としてできました。こちらでの研究内容を簡単にご紹介しますと、1）小原らは、免疫･アレルギー疾患の発症機序や診断法･治療法開発のためのゲノム解析、2）中山らは、新しい部位特異的組み換えシステムを開発してゲノム中の特定の遺伝子や領域を人工的に変えるゲノム改変技術開発、3）鈴木らは、網羅的な遺伝子発現解析と代謝物解析によって、薬用（食用）植物或いは微細藻類などが生産する有用な代謝物に関する遺伝子機能アノテーションと代謝物アノテーションの技術開発、を行っています。こうして並べるとそれぞれが別々のテーマに取り組んでいるようにも見えますが、ゲノム情報を駆使して生体システムの理解を目指す「ゲノミクス」と呼ばれるアプローチを創薬に活用するという視点は一貫しています。近年のDNA塩基配列決定技術や質量分析技術の進歩には目を見張るものがあり、またiPS細胞のような革新的な細胞マニピュレーション技術も現れてきています。これらの最先端技術を駆使して、新しい創薬プロセスの道筋を生み出せたらと願って研究に励んでいます。もしご興味があれば、ぜひ一度かずさDNA研究所にご訪問ください。

薬効薬理学

薬効薬理学研究室（旧薬品化学研究室）では，生化学，細胞・分子生物学，薬理学的手法などを用いて，1）スフィンゴ脂質・その代謝酵素群の細胞薬理作用の解明，2）プロスタノイド受容体シグナルの大腸がんでの役割，3）ホスホリパーゼA２の活性制御機構の解明，4）肺線維症，炎症性大腸炎モデル細胞・動物におけるスフィンゴ脂質やプロスタノイド作用の変動，などを研究テーマとして，基礎的な研究を展開しております．現在（平成25年２月），村山俊彦教授，藤野裕道准教授，中村浩之助教のスタッフと，博士課程の院生３名，修士課程院生７名，薬学科６年・４年次学生２名，薬科学科４年・３年次学生７名の学生が在籍しています．この中には，社会人博士課程１名，中国からの留学生１名（10月入学）が含まれています．今春３月末には，博士課程１名と修士３名がそれぞれの学位を取得し，薬剤の臨床研究の場や，製薬関連企業の研究職（２名）開発職（１名）へと巣立っていきます．最近の大きなトピックは，助教の中村先生が平成24年11月から平成25年９月まで，米国ＮＩＨに留学中であり，最先端の研究マインドをメールなどで私たちに送り込んでくれている点です．

高齢者薬剤学

高齢者薬剤学研究室の端は平成９年に医療薬学専攻が設立されると同時に誕生した「薬物治療学研究室」です。平成13年には「高齢者薬剤学研究室」が新設され、初代教授として上野光一教授が着任しました。その後平成19年３月に薬物治療学研究室の矢野眞吾教授が定年退官を迎え、薬物治療学研究室と高齢者薬剤学研究室が合同することとなり、平成20年～21年にかけて山浦克典講師（現・准教授）、佐藤洋美助教、小林由佳技術職員（附属病院薬剤部）が着任し、現在に至ります。

研究は薬理学、毒性学、病態生理学および薬物動態学を基盤にして、医薬品の臨床使用において見過ごされている問題を予測し、これに対する科学的な裏付けを行い、さらには臨床使用に反映させることを目的としております。一方、研究は千葉大学医学研究院、千葉県立東金病院ならびに千葉県内の保険調剤薬局など臨床部門との連携でも展開してきました。現在の研究対象は、新規に同定されたヒスタミンＨ４受容体と抗掻痒作用に関する研究、がんや糖尿病など生活習慣病の薬物治療に対する薬理学的研究など基礎的な分野から、性差医療・地域医療連携など臨床応用分野での研究、また予防医学的な観点から重要性を増すサプリメントの薬効安全性に関する研究など多岐にわたり、臨床のニーズを捉えた独創性豊かな研究の発展、広い分野でリーダーとして活躍できる人材の育成をめざしております。

分子心血管薬理学

当研究室では、循環器疾患の病態解明やそれに基づいた新たな治療法の開発を目指した研究を行っています。循環器疾患というのは、研究室の名前でもある「心血管」すなわち、心臓や血管に関連する病気のことです。心臓の疾患としては狭心症、心筋梗塞、心臓弁膜症、心不全、不整脈などがあり、血管の疾患としては高血圧、大動脈瘤、解離性大動脈、閉塞性動脈硬化症などがあります。これらの疾患には適切に治療されないと死に至るような怖いものもありますが、わが国

では高齢化や生活習慣の欧米化により循環器疾患の患者数は増加傾向にあります。

これまでたくさんの治療薬が開発され使われてきましたが、治療に反応せず改善がみられない患者さんはまだ多くいらっしゃいます。循環器疾患の治療に関してはまだまだ完成された段階ではありません。特に心臓の働きが悪くなる重症の心不全では、生命予後は極めて悪く心臓移植しか治療法がありません。病気の進行を止めるような有効な治療薬を開発して患者さんの役に立ちたいと思います。現在進行中の研究テーマは以下の通りです。①心不全の病態解明と新規治療法の開発、②動脈硬化の発症および進展における炎症・免疫機構の関与、③虚血性心疾患に対する再生治療の開発、昨年度から学部生と大学院生が仲間に加わり、一緒に仲良く研究を行っています。

生物薬剤学

平成25年３月31日をもって、約20年に亘り生物薬剤学研究室の教授を務められた堀江利治教授が定年退職されました。この２月には教授会主催による最終講義･退職記念祝賀会が齋藤康 千葉大学学長をはじめ多くの研究室OB/OGの出席もあり盛会のうちに行われました。この４月より帝京平成大学 教授に就任されております。また、平成25年１月１日付で東京大学医学部附属病院薬剤部より伊藤晃成先生が約８年ぶりに当研究室に教授として赴任し、平成25年度は、関根秀一助教、大学院生２名（博士課程１名、修士課程１名）、学部生（10名）の体制で研究活動がスタートしております。

昨年度は、ナイジェリアからの国費留学生Enoche Florence Oga氏が２年半での早期修了で学位を取得しました。この４月に英国Central Lancashire大学の講師に就任しています。また約７年間、講師、准教授として活躍された設楽悦久先生が、昨年５月からMeiji Seikaファルマ（株）へと移り、実際の医薬品開発の現場で活躍しております。研究室内では、関根助教が留学していたGroningen大学からXiaoyu Niu氏を３カ月間、短期留学生として迎え、研究交流が続いております。また日本薬物動態学会、日本薬剤学会、日本薬学会等において学部生、大学院生が研究成果を発表しました。昨年度より普段のセミナーに加え、５月に粟津荘司先生（東京薬科大学名誉教授）、１月には中山慎太郎氏（平成13年修士卒、平成24年薬学博士）を講演者として招待し、最近の薬物動態解析法や製薬企業における薬物動態研究の動向について講演頂いた研究室公開セミナーを開催しました。

新たな体制でスタートした今年度もますます、研究に邁進していきたいと思います。

病院薬学

2012年３月31日をもって北田光一先生が定年退職されました。現在では、千葉大学名誉教授であると同時に、日本病院薬剤師会会長に就任し、日本の病院薬剤師を牽引されています。北田先生のご定年を祝して、2012年４月21日に、病院薬学研究室と薬剤部が中心となり退職記念祝賀会が開かれました。参加総数153人となり、盛況で楽しい会となりました。これだけの皆様にお集り頂けたのは、偏に北田先生の暖かい人柄に依るものであり、北田先生の背中から発する教えを皆で改めて感じ取る日にもなりました。写真はそのときの写真です。９月１日になり、新任教授として石井伊郁子が着任し、新生病院薬学研究室がスタートしました。北田先生の「患者さんが一番の先生である」という教えを守り、これからの薬剤師の目を活かした研究の発信源となるよう邁進して参りたいと思います。最後になりましたが、病院薬学研究室の卒業生で薬剤部の薬剤師である竹田真理子さんが「Synbiotics投与がリウマチ疾患モデルマウスにおける病態に及ぼす影響」という研究で、第28回日本静脈経腸栄養学会学術集会のNUTRI YOUNG INVESTIGATOR AWARDを受賞しました。

臨床教育

臨床教育研究室は、医療人として倫理観、使命感を携えて社会の幅広い分野で活躍できる人材を養成することを基本理念とし、現在、教授１名、助教２名体制で学生の教育・研究にあたっている。当研究室では、主に、実際の薬物治療に基づく臨床の課題を扱うテーマが多いことから、研究の場は学内にとどまらず、病院や薬局といった様々な医療現場や学外研究施設と連携を持ち、取り組んでいる。

主な研究テーマは

１）医療用医薬品添付文書に関する研究

医療用医薬品の添付文書は、現在の形式に変更され約10年余り経過した。その間に、大きく変化した医療の現状を踏まえ、現行の医療用の添付文書の問題点を解明し、添付文書の在り方についての検討

２）小児アレルギーの発症機序に関する研究

小児アレルギーの発症と、妊婦・授乳婦の母親の生活習慣及び小児の生活習慣等の関係についての検討

３）オピオイド系鎮痛薬の免疫系に対する影響に関する研究

オピオイド系鎮痛薬による免疫系に対する影響に関して、臨床データに基づいた検討

４）妊婦・授乳婦への医薬品の臨床使用に関する使用評価の研究

妊婦に使用する医薬品の有効性と安全性に関して、臨床データに基づいての検討。

５）後発医薬品の臨床評価に関する研究

後発医薬品に対する患者及び医療関係者の評価に関しての検討及び後発医薬品の有効性の検証のため、降

圧薬を例に、先発品から後発品へ切り替えた際の血圧への影響等の検討

実務薬学

実務薬学研究室では、この３月に研究室初の卒業生が社会に巣立ってゆきました。病院薬剤師、製薬企業と進路は異なりますが、千葉大学で６年間学んだ成果を社会に還元してくれることと期待しています。

また、４月から増田和司先生が病院薬剤部に異動になりました。これまで、千葉大学薬学部６年制教育を充実させるために薬学部と病院薬剤部の間の架け橋として頑張ってくれましたが、今後は、病院薬剤師として実務実習の指導に当たってくださる予定です。薬学部の教育を熟知された薬剤師の先生が実習指導してくださるということは心強い限りです。よろしくお願いいたします。

増田先生の後任として４月より大久保正人先生が着任されました。大久保先生は大学院修了後、千葉大病院薬剤部に勤務され、病院薬剤師業務全般に精通した先生です。また、緩和ケアチームや災害派遣医療チームに属し、チーム医療の場でも第一線で活躍されてきました。増田先生に負けず劣らずの熱いハートの持ち主ですので、これからの活躍に期待しています。

生化学

生化学研究室は、平成23年度末での小林弘教授の退官、斎藤浩美講師、深町利彦助教の退職に伴い、平成24年５月１日より、教授として伊藤素行が、10月１日より、溝口貴正、殿城亜矢子が助教として赴任し、教授１名、助教２名の新体制になりました。平成25年度は、博士課程１名、６年生４名、５年生２名、４年生３名と職員３名、非常勤職員１名の合計14名になります。

当研究室では、個体の発生や老化、がんといった生命現象を分子レベルで理解すべく日夜研究に取り組んでいます。以下が主な研究テーマです。

１）Notchシグナルの活性制御機構の分子メカニズムの解明と人為的制御法の開発

神経発生やがん化のメカニズムをNotchシグナルの観点から解析し、その人為的制御による医療応用のための基礎研究。

２）細胞移動制御機構の解明

Mibユビキチンリガーゼによる細胞移動制御機能:感覚器官形成過程やがん転移における分子メカニズム解明。

３）老化に伴う記憶低下の解明

ショウジョウバエの老化に伴う記憶低下の分子メカニズム解明。

ゼブラフィッシュ、ショウジョウバエなどヒト以外のいきものが増えた生化学研究室です。卒業生を含めご興味を持たれた方は、お気軽にご訪問ください。

薬物学

平成25年２月現在の薬物学研究室の構成は、教員３名（千葉寛教授、小林カオル准教授、降幡知巳助教）、大学院生10名（博士後期課程２名、博士前期課程８名）、学部６年生２名、学部５年生２名、学部４年生４名（４年制２名、６年制３名）、学部３年生５名（４年制５名、６年制１名）、事務補佐員１名の計28名です。薬物学研究室では、薬物代謝酵素と薬物トランスポーターを基軸に「薬物動態・薬効毒性発現メカニズムとその予測法の確立」をテーマとして研究を進めています。最近のニュースは、千葉教授が日本薬物動態学会学会賞を受賞されたことです。また、千葉教授を年会長として日本薬物動態学会第27回年会を開催しました（平成24年11月）。卒業生を含め大勢の方々にご参加、ご協力いただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。平成25年３月には５名の卒業生・修了生を病院と製薬会社に送り出します。OBの皆様には社会人１年生となる後輩達へ叱咤激励をお願いいたします。

薬化学

濱田研卒業生の皆さん、いかがお過ごしですか？2013年２月、とある１日の薬化の日常風景を箇条書きでお届けします。皆さんが居た頃とは同じですか？違いますか？

＊ 研究室配属で薬化を選んでくれた３年生５人が研究室に来始めました。誰も「今日はここまでにしよう」とか言わない環境のためか、心底やる気のある学生達であるためか、来て２週間にして既に夜遅くまで実験しています。

＊ ４年生は３月中旬の卒論発表に備え、ひたすら実験しています。

＊ 就職活動の学生は、履歴書やエントリーシートと格闘しています。着慣れぬスーツを身にまとい、都内を始め日本各地に出動中。卒業生の皆さんが残した「就活レポート」は今も健在、皆に活用されています。

＊ 修士２年、博士課程３年の学生は、無事に卒業出来そうです。

＊ 今日は水曜日、文献セミナーの日。文献セミナーは木曜じゃ？と思った方、最近は水曜日に移動しました。時は過ぎ、曜日は変われど、19：15頃から「何か質問ないの」の声が響き渡るのは、今も昔も変わりません。

＊ 研究室のホームページを出来る限り頻繁に更新するよう心がけています。時々覗いて最近の薬化を感じてください。

No Catalyst, No Life.

薬品合成化学

早いもので、亥鼻に移転してからもうすぐ２年の歳月が過ぎようとしています。快適な研究環境に囲まれ

て、スタッフ３名（西田篤司教授、荒井秀准教授、原田真至助教）及び学生・院生17名で、新しい合成化学を切り開くべく切磋琢磨しています。西田教授がリーダーを努める日本学術振興会アジア研究教育拠点事業（アジアにおける最先端有機化学の新展開）は2013年に４年目を迎えます。アジア諸国でのハイレベルな国際学会の開催、外国人研究者による最先端有機化学の講演会、千葉大学院生のアジア諸国への短期留学やアジア諸国から千葉大への短期留学など、実りある国際交流が活発に展開されています。本年11月には、千葉県誉田のアスレチックセンターでアジア諸国の大学院生による初めての国際シンポジウムが予定されており、当研究室の院生諸君もその準備に向けてそろそろ動き出すことになります。研究面では、天然物の全合成研究と遷移金属触媒反応の開発を両輪に、something newを求めて日々精進しております。大学が懐かしくなったら、是非お立ち寄りください。

病態分析化学

病態分析化学研究室は現教員の体制になって４年目を迎えました。平成24年度には修士（薬科学科）と学士（薬学科）の学生がそれぞれ３名ずつ、新たな社会へと巣立って行きました。そして、今年度は新しく５名の４年生（薬学科１名、薬科学科４名）と１名の博士課程の学生を迎えて、大学院生７名と学部生９名となりました。そのうち、３名がタイ、フィリピン、中国からの留学生ということで、これまでになくずいぶんと国際色豊かな研究室となっております。研究面につきましても、これまでの伝統である「糖鎖の構造と機能」及び「ポリアミンの生理的役割」に関する研究と共に、「無症候性脳梗塞の診断・予防・治療」に関わる研究テーマについても、引き続き展開しております。今後は、薬学研究院に新しく設置されたLC-MSやGC-MSも活用し、更なる研究展開を目指していきます。今後とも温かいご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

製剤工学

この１年の研究室のトピックスを紹介いたします。

・仲井由宣名誉教授の米寿をお祝いする会が昨年６月30日に開催され、仲井先生が千葉大学に赴任された昭和37年以来50年にわたる研究室卒業生が集い、お祝いしました。
・山本教授は千葉大学理事の仕事が６年目となり大学全体の管理運営の仕事で多忙な毎日が続いています。
・森部准教授のこれまでの研究成果に対し、本年５月「旭化成創剤研究奨励賞」が授与されました。
・東助教は昨年９月より１年間の予定で米国ミシガン大学薬学部に留学しています。研究にも英語にも磨きがかかりそうです。
・米持悦生博士（昭和60修）は本年４月星薬科大学に教授として赴任しました。また山下純博士（平成２修）は本号のあいさつにあるように本学部の客員教授に就任しました。堀部俊秀博士（昭和57博）は筑波大学産学連携本部・技術移転マネージャーに就任しました。
・修士２年の並木祥恵さんは昨年９月、第29回シクロデキストリンシンポジウムでポスター賞を受賞しました。

微生物薬品化学

亥鼻に居を移して早１年と半年。新しい研究室にも慣れ、連日スタッフ３名と共に大学院生、学部学生が切磋琢磨し、研究に取り組んでいます。研究は①細菌感染と宿主応答の分子メカニズム　②分子シャペロンとAAA+プロテアーゼの作動原理　③薬剤耐性機構の３本柱で行っております。2012年６月には山本教授が世話人となって「第１回千葉大学感染症ネットワーク研究会」が開催されました。当研究室を代表して高屋准教授が研究発表を行い、学内での共同研究もはじまりました。11月には学部６年生の卒論発表が立派に行われ、３月には国家試験合格を果たしました。2013年１月には新たに学部３年生がメンバーに加わり、早々に研究者としての一歩を踏み出しました。３月には、山本教授が日本細菌学会の第86回総会長を務め、千葉幕張メッセで総会を盛会裏に開催しました。この総会で早くも学部４年生が卒業論文内容について学会発表をし、前田侑也君はワークショップ演者に採択され、庄司竜麻君は優秀発表賞を受賞しました。このことはラボメンバーの刺激となり、「学会デビュー」「論文発表」を目指して、日々精進しております。

薬品製造学

薬品製造学研究室では、オリジナリティーをキーワードに、薬理活性リード化合物の発見、合成、最適化などのメディシナルケミストリーや生体機能解明や疾病診断を目指した新規分子のデザインや評価などのイメージングケミストリーを研究することで、生命・健康科学への学問的貢献を目指しています。具体的には、（１）抗菌、抗酵母、抗腫瘍活性を示すジャドマイシン系抗生物質の全合成研究、（２）アジリジンを合成素子とするインドール、イソキノリン、リグナンなど生理活性天然物を標的にしたアトムエコノミー型合成法の開発、（３）当研究室で見出した強い抗腫瘍活性ナフトキノンモノオキシム類の作用メカニズムの解明や構造活性相関研究、そして（４）新規光分解性保護基を持つ

平成24年５月、那須にて

高機能性バイオプローブの開発、などです。その一方で、新規反応や機能性試薬の開発ならびに実用化などの基礎有機化学的研究にも眼を向けており、特にグアニジン型化合物の機能性に着目し、有機合成化学的視点に加え、環境・資源化学的な視点からもアプローチしています。

（研究室ホームページ：
http://www.p.chiba-u.ac.jp/lab/seizou）

（文責　石川　勉）

生体機能性分子

24年度は博士課程４名、修士課程15名、学部５年生１名、学部４年生５名の計25名の学生が在籍し、日夜研究に励んでいます。

昨年の秋に坂井進一郎千葉大学名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。12月には教授会主催の祝賀会が開催され、２月16日には同門生が集まり、受章祝賀会を執り行いました。80名以上の同門生が一堂に会し、坂井先生の栄えある受章を祝福するとともに、旧交を温めました。

昨年３月に札幌で開催された日本薬学会第132回年会で博士課程３年の中山淳くん、同２年の原田真也くん、修士課程１年の安部美南子さんが優秀発表賞を受賞しました。

23年度に博士号を取得した中山淳くんがアメリカ・スクリプス研究所のD. L. Boger教授のもとへポスドクとして留学しました。８月には博士課程１年の石田寛明くんと修士課程２年の東雅之くんが、そのBoger研究室のもとへ日本学術振興会の組織的な若手研究者等海外派遣プログラムにより短期留学し、世界トップレベルの研究環境を体験してきました。

博士の学位論文題目は以下の通りです。「不斉クライゼン転位反応を鍵段階とした新規インドールアルカロイドPsychotrimineおよびKAM１の不斉全合成研究」「新規Iboga型インドールアルカロイドVoacangalactoneおよびその類縁体の不斉全合成研究」。修士論文の題目にご興味のある方は研究室のHPをご覧下さい。

分子画像薬品学

本研究室は、５名の教職員と博士課程４名、修士課程７名、学部学生７名の総勢23名で構成されています。長い間アイソトープ実験施設の管理・運営にご尽力頂きました熊谷准教授は、今年の３月にご退官されました。熊谷先生の長年のご尽力に深謝申し上げます。

本研究室では、がんの早期診断や治療効果の早期判定を目的として、細胞内の生理学的、生化学的変化の非侵襲的な画像化が可能なアイソトープ標識薬剤や、がんのみを放射線で照射するアイソトープ治療薬剤の開発研究を進めています。これらは共に標的であるがんへ選択的に放射性化合物を送達する新たなデリバリーシステムの構築であり、最近話題となっているTheragnosisのための分子プローブの開発研究です。これらの研究に小動物用SPECT/CT装置を活用しています。

昨年８月には共同研究を行っている日本原子力機構の先生方との合同勉強会を開催し、２日間にわたり熱い討論をかわしました。また今年３月にはギリシャ国立科学研究所よりIoannis Pirmettis先生が来訪し、ご講義と学生とのディスカッションを行いました。

コンパや研究室旅行を始めとする様々な企画や、秋のソフトボール大会を楽しみつつ、日々研究活動に励んでおります。卒業生の皆さま、本研究室に興味をもたれた方、是非お気軽にお立ち寄りください。

活性構造化学

活性構造化学研究室では2009年から2012年まで西千葉キャンパスの薬用植物園において「親子で学ぶ 夏休み薬草教室」を担当しました．薬用植物園の見学と押し葉標本作りを通して子供たちに自然，植物，薬草に親しんでもらうことを目的としております．開催にあたっては環境健康フィールド科学センター 池上文雄教授のご指導をいただきました．

池上先生のお得意とされるジョークを交えた楽しい講義に続いて，薬草園での薬草の解説と薬草の採取，押し葉標本の作製をしていただきました．五感に訴えかける生薬の講義・解説は大変わかりやすく，小中高校生にとってはとても良い経験になったのではないかと思います．とくにベロセンサー（舌）で感じたセンブリの苦みや新鮮な山椒の実のピリッとした刺激等は参加者の皆さんの記憶に残る思い出となったことと思います．太陽の照りつける大変暑い薬草園で蚊に刺されながらの開催でしたが，千葉市をはじめ，遠くは埼玉県や神奈川県からもお越しいただきました．とくに昨年2012年は，約70名の参加者にお越しいただき大変盛況でした．薬草教室を開催するにあたりまして，このたび定年退官を迎えられました池上先生には毎年大変お世話になりました．この場をかりて，深く感謝申し上げます．

2012年 薬草教室の様子

クラス通信

昭和17年卒（翠葉会）

戦争が酣の時、半年繰り上げ卒業で、戦場に職場に勇躍赴いた同級生の中で生き残っている者は今では少なくなり、その上皆90歳の坂を越しました。

翠葉会は出席者が徐々に減少して、平成21年６月を最後に残念ながら開催しておりません。

最後の２～３年は毎回出席する常連は４名（戸村、中村、小幡、新井）のみ。その上平成22年には相次いで戸村、中村、中島等の訃報を聞き、その他の者は不明でクラス会開催は出来なくなってしまいました。

以上の様な事情なので、母校の発展と同窓生諸兄の健康を祈念しつつ、誠に残念ですが今回で翠葉会最終の投稿と致します。　（新井　定吉）

昭和18年９月卒業（るつぼ会）

現在生存者19名　物故者36名です。

卒業以来68年を経過し、年齢も88歳前後となりましたので米寿を祝す同窓会（るつぼ会）を昨年４月７日に墨堤向島で開催致しました。おりも善し墨堤の桜も満開で、天気も上々我々の催しを祝福してくれました。

遠く青森からも駆けつけてくれる熱心な人もおりましたが、参加者は残念ながら僅かに６名でした。参加者は、西川、坂本、細川、水橋、横田、佐川の６名でした。

正に陽春、墨堤の満開の桜、そしてその上に聳え立つスカイツリー、加えて向島芸者のお茶の接待を受け、正に我が世の春の宴でした。お花見を終わり足立の江戸一万来軒で宴会、大いに旧交を暖め、お店のマネージャーのお祝いの肝入れサービスで色々なアルコール飲料の品揃えと共に飲み放題のサービス（幹事の設定も良かったのでしょう？）。思えば大東亜戦争を生き残り、戦後の荒波を乗り越えて米寿を迎えた我々会員が更に健康長寿への精進、これからも世のため人のために何か役立つ事をとの思いでも老人の一徹ながらも全員意見一致致しました。飯塚、坂本、細川君などの発議で大学新校舎落成及び120周年記念を祝した記念品を贈呈したいと発議があり、色々と討議の結果「秋の逍遥歌」をプリントした手拭400本と「生涯矜持」の色紙に当日出席の会員の寄せ書きの額入りを寄贈させて戴きました。写真は、母校を訪問し贈呈した水橋、横田、佐川の３名です。母校、恩師、後輩に些かなりでもプレゼントになり（るつぼ会）会員も年を取っても捨てたものではないと面々自画自賛し大学の更なる発展を祈りました。尚、４月７日の（るつぼ会）には薬友会会長荒野様、母校の石川教授から米寿会の開催にわざわざ祝電をちょうだい致しました。報告の場をお借りして有り難く厚く御礼申し上げます。

（佐川　安壽）

昭和23年卒業

平成24年のクラス会は恒例の新橋「新橋亭新館」で５月12日に開催。ここ数年物故者の急増に加え、出席常連者の体調不良も出始めて、更に今回は所用による欠席も多く一挙に出席予定者が減少し７名となり、当日更に２名の欠席があり、出席者５名のクラス会となった。

少人数だけにお互いゆっくりと懇談が出来た利点はあったが、寂しい感じは否めずクラス会はやはり多数の方々の参加が有って楽しく、またそれが望ましい事を痛感したクラス会でもあった。今年（25年）も５月に新橋亭で開催致しますので昨年は所用で欠席された小沢、片岡、高橋、長沢、長谷川、山下、吉川、諸兄の出席を心からお待ちしております。（案内状は４月前半に差し上げる予定です）『訃報』古川和男君が24,4,7腎不全、矢崎斌彦君が24,4,16誤嚥性肺炎、田中豊君が24,11,19（病名不明）にて３君が逝去、又一時不明であった島崎四郎君については21,4,16に逝去された事が御家族よりの連絡で判明。４君のご冥福を心からお祈り致します。身近なニュースとしては東京葛飾で開局されていた山下君と千葉館山で同じく開局の吉川くんのお二人が閉局されましたのでお伝え致します。

写真、前列左より青柳高明、小林剛、古橋隆宏、後列左より大塚享、三浦清

（三浦　清）

昭和24年卒業

私達の入学は終戦直後の混乱期で入学者が非常に少なく36名、うち物故者14名です。

早いもので卒業から64年経つ。同期最年少の私が83歳、最年長が90歳を超えました。この３年ほどクラス会は開かれていない。たとえ２、３名でも良いから久しぶりに顔をそろえて思い出話に興じたい思いです。同期の中で開局者は14名で４割だ。埼玉勢代表格の牛島涛平君は熊谷市で矢木橋デパートに支店薬局を出店、本支店とも盛業中。大木成之君は船橋市薬剤師会の初代会長を勤め上げ、現在はダンス教室を主宰して毎日大勢の指導で汗を流している。他に変わり種としては西久保博巳君が都内本郷でバッジや優勝カップを製造販売、業界では有名な「ライオン工芸」を経営している。また芹沢英雄君は千葉薬卒業後、国立音大で学び「東京交響楽団」でテンバニーとして、また同楽団の理事としても活躍している。そのかたわら税理士の資格をとり、この15年来我が薬局の顧問税理士としてお世話になっている。最後に私金田茂は、千葉大学の近くでだるま薬局を経営、創業60周年。調剤がキライな私は妻に任せて高血圧症と年々つのる老化現象の増幅に悩みながらも若い頃からの趣味の山旅と写真に打ち込んでいる現在です。　（金田　茂）

昭和25年卒業

昨年はクラス通信を失礼致しました。今年は初夏の候、神奈川県の石井、勝又、田中、松本宏諸兄のお世話で、いつもの新橋、新橋亭新館で会合することになった。現存総員16名［神奈川４、東京４、埼玉２、長野１、千葉５］との日時（近く確定）、出欠の連絡は緊急電話網を活用したい。この冬は、異常に寒かったが、皆乗り越えられたのは何よりである。しかし、

八十代半ばともなればそれなりに老化は不可避、一病或いは二患ながら、養生宜しく頑張っているのが実情。２月末、全員の近況、体調を電話で伺ったが、皆（うち３名は奥方）声はいつもと変わりなくて安心した。最年長の森下さんは転倒が因での脳梗塞を開頭手術で見事に回復。阿出川さんは車椅子使用時発生した圧迫骨折で難儀、入院加療中。高橋さんは自宅で年来の腰痛を加療中。勝又さんは年末、胃の手術が成功、目下静養中。これら三兄には更なるご快気を祈ります。元気なのは、石井、角屋、松本皎、三木、飯島、佐古の諸兄。その他の諸兄は頻尿、足腰の疼痛、肺気腫、前立腺、視力低下、背曲がり等の何れかを抱え、時折通院、適切に対応している。外出可能な方は是非クラスにご来会、近況交歓、体調の確認、当面卒寿を目標の健康談義等をお願いしたいと思います。

（鈴木　昭治郎）

昭和28年卒業（千葉薬28会）

平成24年の同期会は、恒例通り４月の木曜日、４月５日（木）に行われましたが、新井、尾中、岐部、坂口、高橋、林の６名参加で行われました。参加者は今までは15，6名から、少なくても12，3名、それが一挙に一桁になったのは初めてで、矢張り寄る年波か、との感を深くしました。

それに私共の新制大学入学時は、戦後の学制改革の時に当たり、旧制高校や専門学校からの途中入学や新制高校卒業生や６歳年齢差の有る、多彩なメンバー40名が集まり、余りに華々しい活動に、亡くなった初代薬学部長の宮木高明先生に「君等のうち何人かは、薬剤師国家試験に落第するぞ」と脅されたものです、ところが蓋を開けてみたら、全員合格、千葉薬初めて快挙でした。

卒後医学部に再入学、医師になる者もおり、或いは郷里に帰り、薬業を継ぐ者も有り、北は北海道から、南は鹿児島まで、バラバラに成りましたが、今年卒後60年を迎えることになりました。

その間毎年クラス会を開き、その間卒後10年には大学のお膝元千葉市の一流の料亭「牧の屋」に調剤学の福沢教授、生化学の湊教授の御主席を頂きました、その後10年毎に、卒後20年には、箱根　仙石原　仙郷楼。30年には、京都　南禅寺前　菊水。40年には（千葉薬100周年にも当たり）新千葉の薬学部　記念会館にて、（有志にて）カナダツアー。50年には千葉　房総の「くじゅくり」にてと会合を重ねてきました。

今年は卒業60年を迎え 先に申したように、寄る年波でもあり、今後の会の運営について相談する事に致し、恒例の会場を離れ　４月４日（木）、駅降りて徒歩２分、それもエスカレーター・エレベーター完備の、千代田区大手町のKKRホテル東京にて、行う事に致しました。

最後になりますが、薬局経営の傍ら、鉄道専門誌の依頼で電車、EL,DC,DLの写真を撮り続け60年の石川君が昨年３月30日に、薬剤師でありながら卒後60年旁業に熱中した大野君が８月６日に身罷りました、謹んでご冥福を念じます。

（尾中喜代治）

昭和31年卒業（千葉薬三一会）

私ども千葉薬三一会は、今年３月で全員が80歳を迎えます。

これまで一年おきに皆で２泊３日の旅行を楽しみ、旅行のない年は都内でのパーティーを開催して来ました。旅行のあとは毎回、思い出の文集を作って、参加できなかったクラスメートにも旅の報告をしています（写真）。

2008年には「北東北　陸中海岸・遠野の旅」を企画して、北山崎、田老、浄土が浜、釜石、遠野を巡って来ました。思えば東日本大震災が襲う前の北東北を旅したことになり、感慨深いものがあります。美しい景色はどうなっただろう、お世話になった方々は無事だったろうかと心にかかります。

2010年には「出雲路の旅」で皆生温泉、境港、松江、出雲大社などを巡り、一畑薬師にもお参りして来ました。昨年の「母校訪問と南房総の旅」では卒業以来57年ぶりで母校を見学させていただき、18名が参加と大好評でした。

80歳…。来年も頑張って、皆で元気に旅行を楽しみたいと願っています。

（馬場　英子）

昭和32年卒業（千葉薬32会）

本年３月で卒業以来早くも56年が経過した。昭和32年学部卒の44名に、昭和28年同期入学で教養課程２年終了後医学に転進した２名を加えた46名で構成されていた本会も、残念ながら８名の物故者を数えるに至ったが、現在元気な38名のメンバーもここ１～２年で揃って傘寿を越える年齢となった。

卒業以来暫くは機運が高まった折り、数年毎に集いを持って来たが、皆が定年等の事情から仕事の上で第２段階に入った15年位前からは隔年毎に国内各地への小旅行を行う他、卒年に因んで千葉薬32会と改めて命名し原則として毎年３月２日定例会を開いて旧交を温めて来た。毎回20名前後の参加者を得てきたこの会は、会員相互の連絡をスムースにすると共に、在学中に発刊・卒後50年を記念して復刊されいまも続いているクラス雑誌CHAOS制作・発行の原動力ともなっている。

ここのところ数年は会場を固定、日時の案内のみで予め出欠も取らずに開催、高い出席率を得てきたが、今年2013年は３月４日、銀座大増・本店にて実施、出席者は14名であった。尚、折角長年続き互いに啓発しあえる事の多いこの会を、今後は期日・時間・会場を予め完全に固定し、都合の付く者が毎年自由に集まり懇談出来るシステムとしたので、当分は楽しくこの集いを続ける事ができるものと思われる。

（小幡　　誠、辻　　和之）

昭和33年卒業

昭和33年卒の私達のクラス会についてご報告します。

前年度のクラス会で幹事さんから、次のクラス会は横浜でやりましょうと提案され、そのため横浜在住の私達が幹事に指名されました。

そこでなるべく横浜らしいところにしようと場所を考えた結果、港の見える丘公園に立つＫＫＲポートヒル横浜を会場にすることに決めました。港の見える丘公園は横浜港を囲む地域の中ではもっとも高台にあって、大桟橋、山下公園等、横浜港が一望、初めての人でも横浜を満喫してもらえるだろうと思ったからです。

クラス会は昨年５月25日に行われ、参加者は26名（内女性８名）でした。最も遠方からは宝塚市の吉成さん、その他、東京、埼玉、千葉、から皆さん遠路はるばる横浜まで集まってこられました。

会は12時半からで約２時間。４階の横浜港が見渡せ

る会場で、食事をしながらひとりひとりほぼ全員の近況報告がありました。散会後は希望者だけ二次会へ。二次会は横浜駅近くの地下街で行い、13名が参加しました。 （猪股　弘子）

昭和34年卒（亥鼻三四会）

昨年10月、１泊２日で卒後53年目の亥鼻34会を伊豆高原ユートピアで開催した。ここは某健康保険組合の直轄保養所で、収容人数60名の結構大きな施設である。岩﨑君のご好意ですべての施設を貸切で使用させていただいた。今回の参加者は安部、岩﨑、神崎、神田、木下、齊藤、佐藤、関根、武川、武田、西井戸、野村、山川、中嶋の14名で、最近５年間の亥鼻34会では最少参加人数であった。現役のときは皆仕事優先で「業務多忙」が欠席の最大理由であったが、高齢になるとほとんどの場合、腰痛、歩行困難など、体調不良で参加できないとコメントしてくる人が多くなった。考えてみると我クラスメートも全員が後期高齢者の仲間入りをして、身体のどこかに多少の故障を抱えているのも仕方のないことである。

懇親会は、相模湾で獲れた新鮮な魚介類に舌鼓を打ちながら久しぶりの再会を楽しみ、クラスメートの近況報告に耳を傾けた。やはりここでも話題の中心は健康のことであり、どうやら「亥鼻34会に参加できるだけでも幸せ」ということが結論のようだった。

今後３年間の幹事を今年神崎・長尾、'14年神田・武川、'15年野村・武田の諸氏に担当してもらうことで了承された。懇親会はあっという間に２時間が過ぎ、その後広いカラオケルームでそれぞれ得意曲を披露した。どこで練習してきたのか皆意外？に上手なのには恐れ入りました。

翌日は天候にも恵まれ、ゴルフ組と伊豆高原観光組に分かれ、それぞれ爽やかな一日を満喫し来年の再会を約して帰路についた。

（中嶋　啓介）

昭和35年卒業（珊瑚会）

昨年のクラス会は白石、遠田幹事の企画で５月26日東京駅に近い丸の内OAZO５階、数寄屋風の落ち着いた造りの「えん」で開催。18名が参加した。新薬学部の現状と今後への展望などの報告の後、各自の近況、薬学部時代の思い出話に花が咲いた。会終了後、皇居東御苑に入苑、回遊式庭園の二の丸庭園、百人番所、皇居所蔵の美術品を鑑賞できる三の丸尚蔵館などを散策。東京駅に戻って完成直近の新東京駅舎を見物。大正期の創建当初の威容が蘇ろうとする赤レンガの新駅舎に一同感嘆。今年も全員が元気であること、さらに母校の発展・活躍を祈念して散会となりました。

珊瑚会々員30名、歳相応に不調を抱えてはいますが、今年度はまずまず平穏に過ごすことが出来ました。旅行、山行き、ゴルフ、時に呑み会を楽しみ、薬剤師の仕事にも頑張っています。

（秦　　初博）

昭和36年卒（三六会）

我々のクラスは、ここ十数年、年１回２泊３日の旅行、２年に１回位の会食クラス会を行っている。24年度は旅行のみで、10月末に金沢市内観光、小型観光バスによる奥能登一周見物の２泊３日の旅行を行った。参加者は前半６人後半５人であった。人数が少ないからこそであろうか、皆で楽しい濃密な時間を過ごせたように思う。しかし、前年までは、旅行の参加者は10人から10数人、会食クラス会は10数人だったので、急に減ったことになる。たまたまだったのかもしれないが、我々ももう74-5歳である。亡くなったメンバーは４人で、前後のクラスよりも少ないが、各自の健康上の問題、伴侶や家族の介護のこともあり、時間が取れる人が少なくなっているのであろう。内容に少し工夫が必要かも知れないが、旅行も含め可能な限りクラス会を続けていきたいと思う。なお写真は、金沢城のお堀の傍の小公園で撮ったものである。

（村上　泰興）

昭和37年卒業

平成24年の同窓会は、2012年６月３日（日）に前年と同じ有楽町ニュートーキョーで開催された。出席者は17名（男子９名、女子８名）で、卒業後50周年を迎えるので出席者がふえると期待したのだが、例年とそれほど変わらなかった。

我々の学年は卒業後、薬学関連企業にすすんだ者はもちろん多いが、薬局経営するものもあり、薬学関連分野以外に職を得たものもいる。その中でも異色ともいえる斎藤實さん、また、薬局勤務に忙しい日々をすごしている伊坂光さんのお話をうかがった。それぞれの話は興趣深く、ちがう分野にすすむとこれほどちがう世界を経験し、思索するのかとさらに興味がわいてくることだった。

多忙であるかたも、顔をみない方々も同窓会に今年はぜひ参加してくださり、人それぞれの、さまざまな積もる話を聞かせてほしいと思っている。

クラスの各人はすでに齢70を越え、各自健康保持にとくに注意を払っているようであるが、近年亡くなる者が続く。今回も同窓会が終わった直後にまた一人のクラスメートの訃報を聞くことになった。まことに残念である。今後も精神と体の健康を維持し、長く活動するように願わずにいられない。

（清水　征生）

昭和38年卒業（三葉会）

昨年１月15日に坂口悦生さんが逝去されました。ご冥福をお祈り致します。卒業以来半世紀を過ぎて物故者も８名となりました、自然の摂理とはいえ寂しい限りです。昨年のクラス会は多くの方が出席できるようにと９月下旬に東京で開催しましたが、仕事や体調の関係で出席者は当初の予定より数名減り20名でした。初日は東京駅八重洲口近くのホテルでの懇談会でしたが、会食途中での近況報告では予定の倍以上の時間を費やすほど皆さん熱く語られ充実したクラス会に感じ

ました。閉会後、希望者はそのまま宿泊し、翌日は17名がホテル前から貸切にした「はとバス」で浅草～柴又～巣鴨のコースで都内観光をし、夕刻に改装を終えた東京駅丸の内口で解散しました。今年は卒業50周年を迎えますので、その記念として会誌「あまるがむ」の卒業50周年記念号（通算７号）を発行する準備を昨年から進めてきました。皆さんのご協力で27名からの寄稿、亡くなられた方々への追悼原稿やご遺族からの寄稿などかなり充実したものと編集委員一同自負しています。３月末発行の予定です。

（鷲見　常夫）

昭和39年卒業

昭和39年卒業の同級生の皆様御元気におすごしのことと存じます。昨年度は同級生全ての皆様が古稀を迎えた記念の年でした。同級会は久しぶりに千葉で行いました。千葉駅近くの高層ビルの21階にある海燕亭で、11月10日（土）正午より、15名の皆様が参加して、旧交を温めました。いろいろと話が弾み、楽しい一時を過ごしました。当日は幸運にも富士山の眺めが絶景で、料理共々楽しみました。クラス会終了後は、ほとんどの人が亥鼻の散策を楽しみました。昔私達が学んだ学舎は跡形もなく、医学薬学研究院の二棟の高層建物に皆さんは驚いておられました。ただ、私達が毎日通学の際眺めていた巨大な楠の木だけが昔のままで、皆さんは木の香を懐かしがっておられました。次回の幹事は久保君で、同級会は東京で行われます。今回参加出来なかった人も、次回は是非参加し、旧交を温め合いましょう。

（五十嵐一衛）

昭和40年卒業（峠の会）

クラス会に出席するたびに月日のたつのが速いのに驚かされます。

平成24年度のクラス会（峠の会）は、赤司さんと齋田さんが幹事となって11月９日（金）に新宿・「翡翠宮」（都庁前のホテル１F）にて開催されました。出席者は11名。ウィークデーの開催だったこともあり、この数年間連続出席の普天間さんと松田さんが残念ながら欠席されましたが、一方十数年ぶりに奈良県から瀧尾君が以前と変わらぬ体型で颯爽と現れ、また４年前はレギュラー出席者の一人だった村瀬さんもお変わりないご様子で参加され会をにぎやかに盛り上げてくれました。

当日は晴天に恵まれましたので、会食後会場前の東京都庁第１本庁舎45階にある展望室（地上202m）をぐるっと一周して360度の眺望を楽しみました。展望室のカフェで飲食・歓談してから散会となりました。

次回の幹事は、稲葉　實君と吹野秀亀君にお願いすることになりました。企画上手なお二人ですので期待しましょう。

（平野　武明）

昭和41年卒業（66会）

昭和41年卒生、昨年から今年に掛け古希を迎える年代に突入。そしてあと３年も経てば卒後50年の半世紀となります。年金生活が板に付いた人、未だ々々、俺は私は現役組で若いのよと云ったごっちゃ混ぜの仲間となりました。

昨年のビックス粒子の発見、山中教授のiPS細胞でのノーベル賞受賞の解説記事に直ぐに追いつけた仲間は幾人いたかしらん？　薬学部も120余年の歴史、一昨秋に亥鼻の新学舎を見学した折り、ユニークな研究課題やそのレベルの高さを伺い、大いなる期待を膨らませました。益々のご研鑽あらんことを…。

恒例のクラス会は、昨年はお休み。今年は６月初めに伊豆の温泉で実施予定とのこと。

元気な顔を合わせ、談笑することが健康の秘訣と昨今思っております。

（深草　佑一）

昭和51年卒業

卒業して早37年、皆様お元気でしょうか？今年は巳年で「還暦」を迎える方が大勢いらっしゃることと思います。クラス会で会うたびに話題の中心が自分の健康や、親の介護などになってきていますね。「還暦」を人生のリセットのタイミングとして、次のステップ（趣味や新しい仕事）へ踏み出すきっかけとしたいものです。

さて、私は大学に在職していますので薬学教育の大きな変化を身近に感じています。今特に薬剤師に求められているのが、「コミュニケーション能力」です。５年次の実務実習に出る前にトレーニングはしますが、現場に出ると薬局のスタッフと会話できない、患者さんを前にして無表情で言葉のキャッチボールにならない、・・・など、指導薬剤師さんからご指摘を頂くこともあります。大学教員が巡回指導でアドバイスをしますが、入学時よりメンタル面も含めた学生支援が大きな課題となっております。

今後も実務実習などでお世話になると思いますが、是非現場のご意見をお聞かせ下さい。（渡辺　敏子）

昭和55年卒業

「同期会で思ったこと」

2012年９月９日（日）日比谷公園の中にある松本楼で同期会が行われました。東京の真ん中にあるのに周囲を緑に囲まれ、まるで避暑地のさわやかなレストランに行ったような気分で久しぶりに会った仲間29人で話が弾みました。考えてみれば、日本全国いろいろなところから千葉大に集まって４年間の同じ時間を共有し、卒業後には再び北海道から九州まで、中にはアメリカに長く住んでいて最近帰ってきたばかりという人まで、さまざまな場所に散らばってそれぞれ頑張っているというのはすごいことだと思います。ちなみに現在千葉県に住んでいるのは卒業生85人中13人です。なぜその数字が目に付いたかというと、大学の役割について考える機会が最近多いからです。医療専門職を養成する大学の果たす役割として能力のある専門職者を養成するのはもちろんですが、さらに今はその地域に貢献する医療者を養成することが期待されています。それは大都市以外の地域で医療者不足が問題になっていて、千葉県でも深刻な問題だからです。しかしこうして自分たちの軌跡を振り返ってみても、大学の卒業生をその地域に繋ぎ止めるような介入は可能なのか？あるいは当人にとってはどうなのか？と疑問に思います。今の薬学部では状況は違うのかもしれませんが、私たちの学生時代には全国から来た人はまた全国に帰って行ったわけです。人がどこで仕事をして暮らしていくのかは就職先によったり、結婚した相手によったり、人との出会いによったり様々な偶然の積み重ねで決まっていくものなんだなと年月を経てあらためて実感するところもあります。皆の興味深い話を聞きな

がらこんなことを考えているうちに楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。幹事の阿部さん、佐藤さん、田中さん、渡辺さんありがとうございました。

（朝比奈真由美）

平成13年卒業

卒業から10年以上が経過しました。同級生の各方面からも仕事や私生活（趣味や結婚や出産など）の楽しい連絡が増えており、充実した日々がうかがえます。昨年は、私を含め、我々の学年の薬学部野球部の６名（選手４名、マネージャー２名）＋２学年下のマネージャー２名が、久しぶりに集まる同窓会を行いました。数名は子連れ参加となり、にぎやかな楽しい会となりました。午前中にスカイツリーを望む浅草から水上バスで談笑をしながらお台場に向かい、お台場にてゆっくりと昼食。その後、日本科学未来館見学という、勉強が大好きな野球部らしい（笑）同窓会となりました。ソーシャルネットワークサービスの普及で、遠くにいる友人とインターネット上で交流することが簡単になってきておりますが、やはり集まって行動を共にして時間を共有することは素晴らしいな、と改めて感じました。今年も皆さんからの楽しいご連絡をお待ちしております。

（片桐　大輔）

平成20年卒業

早いもので学部卒業から丸５年、修士卒業から丸３年が経とうとしています。私たちの学年はまだ正式な同窓会というものを開催したことはありませんが、度々ある何人かで集まる機会やFacebook等を通じて互いの近況を共有し合っています。職業や私生活も様々で、薬学出身者の活躍の場の幅広さ、時の流れの早さを実感しています。

先日、出身研究室の同期の結婚式がありました。その余興として先生方や先輩・同期・後輩からのお祝いメッセージや思い出写真を組み合わせた動画を作成しようということになり、撮影のため約２年半ぶりに亥鼻キャンパスを訪れました。学生時代自転車で駆け上った長い坂道を今回はゆったりとバスで上り、出身研究室の入る医薬系総合研究棟（今はⅠ期棟と呼ばれているとのこと）へ足を踏み入れました。入った時の動物室のニオイやフロアーの空気感がそのままで、一緒に訪れた同期と思わず懐かし～と漏らしてしまいました。新しく建てられたⅡ期棟の外観は見たもののそのまま通り過ぎて来てしまったのは、ピカピカの姿に何となくジェラシーを感じたせいなのかなと思い返しつつ、次回亥鼻を訪れた際にはぜひ建物の内部も見学してみたいと思いました。

（太田　　雪）

平成22年（薬科学科）、24年（薬学科）卒業

クラス通信の原稿の依頼を頂き、大学生活を振り返りました。薬学六年制教育第一期生ということで、色々と先が見えない不安を抱えながらも、楽しく過ごしていた学生生活を思い出しました。四年制の薬学部も並立されたため、卒業年は２年ずれることになりましたが、共に千葉で学んだ「06P」は大切なクラスメイトであるという認識は、皆共通であると思っています。

卒業して時が経ち、皆が様々な分野で活躍しているという話を聞きます。大学時代に一緒に学ぶことが出来たことを嬉しく思うと共に、自分も頑張らねばという気持ちになります。

卒業してから同窓会はまだ開催出来ていませんが、先輩方のクラス通信を見ると二年毎等に開催しているクラスもあるようです。我々のクラスもそのように集まって、大学生活を思い出すと共に近況等を語り合う機会を作れたら、と思っています。今年の夏から秋あたりに第一回同窓会、いかがでしょうか。

（大澤　伸彦）

平成24年（薬科学科）卒業

近況報告ではありませんが、大学生活の終盤を迎えた現在、私が考えていることを拙筆ながらお話ししたいと思います。

長い冬が終わりを告げ、ようやく春の便りを感じる季節が訪れました。私はこの季節が大好きです。春の薫は、期待と不安に胸膨ませた大学入学時を思い出させ、「もう一度ここから歩き出そう」と、私の決意を新たにしてくれるからです。

さて、大学生活を振り返ると、そこには幾つもの初めてがありました。初めての一人暮らし。専門的な授業。アルバイトやサークル活動。目まぐるしい生活に戸惑うことも多くありましたが、いつでも私の周りには薬学部の仲間がおり、楽しく乗り越えることができました。そして夢中で駆け抜けてきた日々の中で、私たちは確かな「絆」を築きあげてきたと感じています。

社会に出ようとしている今、私は再び５年前と同じ心境にいます。しかし、５年前とは異なり、私たちは千葉大学薬学部で培った絆を持っています。この絆を胸に、私たちはどんな困難でも乗り越えていけるだろうと感じます。すでに社会で活躍なされている皆様方、どうか温かい目で私たちを見守っていただけると嬉しいです。そして同期のみなさん。私には、いつの日か成長した皆と再会を果たしたいという夢があります。ぜひ、春の季節にまた千葉大学薬学部で逢いましょう。

写真「薬友」
（３月某日　薬学Ⅱ棟前にて）

（松本　渉吾）

ゐのはな山岳会

ゐのはな山岳会の活動状況について、ご紹介致します。

〔昨年の活動〕

１月日本平と東照宮、２月蔵王樹氷ハイク・丹沢白山、３月鶴島御前山、４月蓑山（皆野）、５月鳴虫山（日光）、６月箱根湿生花園、７月栄太郎峠（越後湯沢）、８月立山、旭岳～トムラウシ山（サテライト山行）、９月群馬甘楽町散策、10月藤里駒ケ岳（白神山地）（集合写真）、（白神山地の紅葉の美しさと規模は圧倒的でした）

11月大小山（両毛線富田）、12月湯河原城山

その他納涼会と忘年会

〔本年の予定〕
１月氷川神社（川越）、２月高塚山（南房総千倉）、
３月観音山丘陵（高崎）、４月六甲山（１泊）、
５月軽井沢高原、６月岩船駒ケ岳（１泊）、
７月高山と小田代原（日光）、８月北八ヶ岳、
９月伯耆大山と三徳山など　（３泊）、
10月斧窪御前山（中央線梁川）、11月青木が原樹海、
12月箱根　　その他納涼会と忘年会

〔お誘い〕
平均体力年齢が60才代のメンバーが、風呂と酒付きの日帰りハイクや夏合宿・秋合宿・スキー合宿を満喫しています。

山と花と千葉薬の先輩に興味があるけどきっかけが無い方、どうぞお友達と誘い合わせて参加してみませんか。きっと「いいね！」の山行になると思います。（ご連絡は52年卒の角田範子atukak@fb3.so-net.ne.jpさんまで）　**（柿沢　英則）**

千葉大薬友会ゴルフ

早いもので平成16年春に発足した「千葉薬友会ゴルフ」も今年で10年になります。昨年の４月17日に第17回、10月19日に第18回を磯子CCで挙行致しましたが、両日とも天候に恵まれ中でも17回は桜も未だ残り風情が有りました。

成績　第17回　①横田友三郎　②吉岡武男
　　③田村隼也　　BB渡辺楷
　　第18回　①田村隼也　②村瀬一郎　③勝浦公男
　　BB渡辺楷

春は久し振りの横田氏と秋は埼玉蓮田市より遠征の田村氏が優勝されました。又此処数年お休みされていた村瀬寿奈子さんが復帰され、紅３点となり会も華やぎました。今年の春の19回大会は昨年予告致しました様に４月５日（金）9,59インスタートで観桜ゴルフ会を行います。又秋の20回大会は10月15日（火）9,03インスタートを確保しております。特に東京で横浜に近い方や神奈川県にお住まいの方は足の便も良いと思いますので（電車なら根岸線洋光台下車クラブバスで５分、車なら横浜横須賀道路にて港南台インター下車２分）同好の士をお誘いの上ご参加を心よりお待ちしております。

『連絡先』幹事　勝浦公男（S44卒）TEL 03-3565-3428
第18回出席者前列左より　長谷川（恵）S44、三浦S23、三浦（特）、村瀬（寿）S40、後列左より　長谷川S43、秦S35、勝浦S44、村瀬S38、渡辺S33、田村S42

（幹事　勝浦　公男、三浦　　清）

サークル紹介

薬学茶道部

薬学茶道部は表千家の先生をお呼びして週に１回活動しています。２年ほど前に活動場所を西千葉から亥鼻に移し、茶室の設備が万全ではありませんが工夫をしながら茶道の稽古に励んでいます。先生のご指導は優しく、部員は現在12名と少人数なので先輩後輩の仲も良く、和やかな雰囲気のなか忙しさを忘れ癒される時間を過ごしています。また、卒業時にはお免状を貰うことができます。主な行事は11月の大学祭で開くお茶会で、部員は着物を着てお点前を披露します。毎年たくさんの方に来ていただいています。日々の練習以外にも年１回の部員旅行など楽しい行事があります。大学から茶道を始めた部員がほとんどなので、何か新しいことを始めるにはぴったりなサークルです。

（武中　聡美）

薬学テニス部

薬学テニス部は学部１年生から３年生を中心とした20名ほどの部員で、主に西千葉キャンパスのコートを使用して週に１回程度活動しています。経験者はもちろん、初心者も多く、初めての人でも気軽に参加できます。全学のサークルほど人数が多くないので、初めての人にはラケットの握り方から打ち方などを丁寧に教えることができるため、新たにテニスを始めるにはぴったりだと思います。一方、経験者は激しく打ち合ったり試合をしたりと、それぞれの部員がテニスを楽しんでいます。夏休みにはしばらく行われていなかった合宿を復活させ、１泊２日で千葉の白子町へ行ってきました。テニスはもちろん、バーベキューなどをすることで部員の交流をさらに深めることができました。大学生になると運動不足になりがちですが、子供からお年寄りまで楽しめるテニスによってそれも解消できる、和気藹々とした雰囲気のサークルです。

（石岡　詩織）

東洋医学研究会

こんにちは、私たちは薬学部サークルの東洋医学研究会です。

私たち東医研は、主にパワーポイントを使った勉強会や、定期的に開かれる自由講座を聴きに行くことで漢方薬や東洋医学について学んでいます。勉強会や自由講座は必ずしも出席する必要はないので、他のサークルとの兼部も大歓迎です。

春には医学部東医研と合同で新歓等を企画しておりますので、一度見に来ていただけたら幸いです。また、夏にはサークル旅行（去年は軽井沢へ行ってきました！）や漢方薬に関連する実験をやっていて、勉強とは別にイベントを開くことがあるので、そこまで堅苦しいサークルではないです。今年もいくつか企画を考えておりますので、是非遊びに来ていただけると嬉しいです。薬学部の先輩から今後についての話を聞くこともできますよ！

そんな私たち東医研では、現在部員が少なめなのでサークルを盛り上げてくれる新入部員を募集中です！

（平田　健介）

学部だより

教員の異動（2012. 5. 2～2013. 3. 31）

24. 6. 30　辞職　中山祐治　准教授(分子細胞生物学)
　　京都薬科大学教授
24. 8. 1　昇任　福本泰典　講師（　〃　）
24. 10. 1　採用　溝口貴正　助教（生化学）
24. 10. 1　採用　殿城亜矢子　助教（　〃　）
24. 10. 10　辞職　濱嶋祥就　助教（薬化学）
24. 12. 1　採用　山口憲孝　助教（分子細胞生物学）
25. 1. 1　採用　伊藤晃成　教授（生物薬剤学）
25. 3. 1　昇任　山浦克典　准教授（高齢者薬剤学）
25. 3. 31　定年退職　堀江利治　教授（生物薬剤学）

2013年度薬学部・大学院医学薬学府入学者

学部入学　88名（男44名、女44名：推薦10名、前期66名、後期11名、帰国子女１名）
（出身県別：北海道１名、茨城５名、埼玉13名、千葉23名、東京24名、
神奈川10名、石川１名、山梨１名、長野３名、静岡４名、大阪１名、広島１名、鹿児島１名）
修士（薬学領域）入学　43名：総合薬品科学専攻43名
博士（薬学領域）入学　18名：先端医学薬学専攻８名、先端創薬科学専攻10名

薬剤師国家試験合格状況

平成25年３月２、３日実施
新卒者合格率　90.2%（37名）

2012年度　卒業生・修了生の進路

学部４年制　38名：進学38名（千葉大学35名　他大学３名）
学部６年制　41名：進学　５名（千葉大学５名）
病院・薬局：12名（徳洲会病院、千葉大学附属病院，北海道大学附属病院、京都第二赤十字病院、帝京大学病院、静岡県立病院機構、虎の門病院、長野県立病院機構、前橋赤十字病院、沖縄協同病院、）
企業：17名（興和株式会社、生化学工業、シミック㈱、アステラス製薬、アインファーマシーズ、大正製薬㈱、アステラス製薬、日本調剤㈱，大正製薬㈱、あすか製薬㈱、㈱CFSコーポレーション、㈱資生堂、薬樹株式会社、武田薬品工業㈱、㈱タカサ）
公務員・その他　７名：（(独）医薬品医療機器総合機構、東京都、厚生労働省、群馬県庁、静岡県、千葉保健共同企画）
修士修了　40名：進学７名（千葉大学６名　他大学１名）
企業　29名：（メビックス㈱、ヤクルト、大塚製薬、日本ケミファ、鳥居薬品、持田製薬、大日本住友製薬、日本たばこ産業、田辺三菱製薬株式会社、トーアエイヨー、和光純薬工業株式会社、武田薬品、ライオン（研究所）、東和薬品株式会社、大正製薬、第一三共プロファーマ、大正製薬株式会社、東京化成工業、大鵬薬品、アステラス製薬、大日本住友製薬㈱フロイント産業、フロイント産業、小野薬品工業、伊藤ハム、信越化学、アステラス製薬、National Nuclear Energy Agency）
公務員・その他　１名：（(独）医薬品医療機器総合機構、
未定：３名
博士修了　23名：病院・薬局４名（千葉大学附属病院、聖路加病院、コスモ調剤薬局）
企業　12名：（塩野義製薬、広栄化学、イーピーエス㈱、大塚製薬、帝人ファーマ㈱，中外製薬㈱　鎌倉研究所、ミノファーゲン製薬、三菱化学、エスエス製薬、住友重機械工業㈱、第一三共㈱、）
公務員・その他：　７名（微生物化学研究所、日本原子力研究開発機構、京都大学薬学部ポスドク、東京大学、㈱環境技術研究所、ベス・イスラエル・ディーコネス医療センター、帝京大学）

2012年度　博士学位授与一覧

課程博士（甲号）

氏　名	学位の種類	論　文　題　目	授与年月日
佐々岡　沙羅	博士（薬学）	2次元フーリエ変換を用いたクラフトテープの異同識別	平成24年９月28日
校條　康宏	博士（薬学）	有機触媒を用いた不斉アジリジン化を鍵反応とする (-)-agelastatin Aの全合成	平成24年９月28日
渡辺　喬之	博士（医薬学）	多剤耐性タンパクMRPsを介した細胞のヒ素毒性調節機構	平成25年３月26日
刈込　博	博士（医薬学）	妊娠中のインフルエンザワクチン予防接種に関する研究 - 安全性の評価と患者教育 -	平成25年３月26日
渡辺　健太	博士（医薬学）	Acrolein-conjugated low density lipoprotein induces macrophage foam cell formation （アクロレイン化LDLによるマクロファージの泡沫化に関する研究）	平成25年３月26日
三嶋　雄太	博士（医薬学）	HAT複合体構成因子Brd1の血液細胞における機能解析	平成25年３月26日
石橋　賢一	博士（医薬学）	チロシンリン酸化による核内ErbB4 シグナルの制御	平成25年３月26日
GUERRA GOMEZ FRANCISCO LAZARO	博士（薬学）	Development of Metal-based Radiopharmaceuticals for Positron Emission Tomography Imaging: Production of Zinc- 63 and Molecular Design for Gallium-68 Labeled Probes （ポジトロン断層法イメージングに使用する金属放射性薬剤の開発について：亜鉛-63の製造とガリウム?68標識プローブの分子設計）	平成25年３月26日
豊村　香織	博士（薬学）	セラミド代謝系に関する研究：Srcによるセラミダーゼ活性制御機構の解明	平成25年３月26日
藤澤　道雄	博士（薬学）	長時間作用型カルシウム拮抗薬アゼルニジピンの心血管系に対する作用の薬理学的研究	平成25年３月26日
安藤　茂	博士（薬学）	特異的な結晶構造を有するナプロキセン - ニコチンアミド cocrystalの物理化学的特性及びその構造解析	平成25年３月26日
上畠　康嗣	博士（薬学）	マイクロリアクターを利用した新反応の開発とSchizocommuninの全合成	平成25年３月26日
王　欣	博士（薬学）	The effects of acidic extracellular environments on TCR signal transduction （酸性環境下で働くTCRシグナル伝達の解析）	平成25年３月26日
大髙　遵平	博士（薬学）	抗腫瘍・抗HIV活性環状デプシペプチドHomophymine Aの全合成研究	平成25年３月26日
角河　和未	博士（薬学）	不斉アリル位アミノ化反応を用いた生物活性化合物の合成研究	平成25年３月26日
鈴木　博元	博士（薬学）	分子イメージングや内照射治療への応用を目的とする新規二官能性キレート試薬の開発に関する研究	平成25年３月26日
高野　泰宏	博士（薬学）	炎症性肺疾患における好中球浸潤抑制作用を有する新規ビタミンD3誘導体の創薬研究	平成25年３月26日
高橋　伸明	博士（薬学）	不斉クライゼン転位反応を鍵段階とした新規インドールアルカロイドPsychotrimine およびKAM1の不斉全合成研究	平成25年３月26日
羽田　樹人	博士（薬学）	血管新生阻害作用を有する新規抗癌剤の創製研究	平成25年３月26日
原田　真也	博士（薬学）	新規Iboga型インドールアルカロイド、Voacangalactone及びその類縁体の不斉全合成研究	平成25年３月26日
平岡　紫陽	博士（薬学）	不斉Diels-Alder反応を用いる天然物の不斉合成研究	平成25年３月26日
伏見　升成	博士（薬学）	湿式造粒により調製した練合顆粒中の低置換度ヒドロキシプロピルセルロースと水溶性薬物の分子間相互作用に関する研究	平成25年３月26日
Md. Iqbal Mahmood	博士（薬学）	Computational study on the structural stability of membrane protein and the binding affinity of peptide interacting protein （タンパク質の構造安定性ならびにペプチドリガンドとの結合親和性に関する研究）	平成25年３月26日
山本　正雄	博士（薬学）	アントシアニンの抗掻痒作用とサプリメントの品質評価に関する研究	平成25年３月26日
Enoche Florence OGA	博士（薬学）	Enzyme and transporter-mediated drug-drug and herb-drug interactions of the antimalarials and HIV antiretrovirals （抗マラリア薬、抗HIVレトロウイルス薬による代謝酵素、トランスポーターを介した薬物間、ハーブ・薬物間相互作用に関する研究）	平成25年３月26日

論文博士（乙号）

氏　名	学位の種類	論　文　題　目	授与年月日
赤羽　隆文	博士（薬学）	Impacts of species differences in drug metabolizing enzymes on human bioavailability prediction. （ヒトのバイオアベイラビリティ予測における薬物代謝酵素の種差の影響に関する研究）	平成24年９月28日
落合　貢司	博士（薬学）	気管支拡張作用および抗炎症作用を有するデュアルホスホジェステラーゼ3/4阻害剤の開発研究	平成25年３月26日
今若　治夫	博士（薬学）	経口バイオアベイラビリティの予測と評価に関する研究	平成25年３月26日
常田　洋平	博士（薬学）	術後消化管障害における大建中湯の薬理作用機序に関する研究	平成25年３月26日
小林　幹	博士（薬学）	嘔吐誘発低減を目指した新規Ⅳ型ホスホジエステラーゼ阻害薬による喘息制御	平成25年３月26日

薬友会より

千葉大薬友会ホームページはインターネットで以下の場所あります。今までの薬友会報が見られとともに、住所変更などもここからメイルで連絡できます。

http://www.p.chiba-u.ac.jp/yakuyukai/

平成25－26年　主な活動予定

25年５月　薬友会報23号発行
　　７月　役員会・常任理事会および生涯教育セミナー
　　12月　役員会・常任理事会
26年５月　薬友会報24号発行
　　７月　役員会・常任理事会・総会および生涯教育セミナー
　　12月　役員会・常任理事会

平成24年　活動報告

３月　新入生入会案内（新規終身会員87名）
５月　会報22号発行
７月　第21回千葉大学薬友会生涯教育セミナー（宮木高明セミナー）開催（薬学部120周年記念講堂）「くすりと健康」（講師４名、参加者184名）
12月　役員会・常任理事会

お知らせ

本会活動のますますの活性化のため、会員のみなさまに終身会員へのご加入とご寄付をお願いしております。

１）終身会員：会費２万円、昭和48年に開設（現在加入率約50％）。会員名簿ＣＤを更新のたびに無料にて配布いたします。

２）ご寄付：一口２千円から随時受付けております。とくに、終身会員会費が１万円であった会員のみなさまのご協力をお願い申しあげます。
上記いずれのお申し込みも、薬友会報に同封の払込用紙の通信欄に、「終身会員」あるいは「寄付」とご明記のうえ、氏名、住所、卒業年度をご記入いただき、＜郵便振替口座 00150- 5 -551796 千葉大学薬友会＞にお願い申しあげます。

３）会報や名簿等への広告掲載をご希望の方は薬友会の会報委員会・名簿委員会まで郵便やメイル等でご連絡をお願い申しあげます。会員様以外の広告掲載も歓迎します。

各種委員会名簿（平成25年度）

総務委員会　○根矢三郎、星野忠次、鈴木優章、石橋正巳（前委員長、アドバイザー）

財務委員会　○根本哲宏、濱田康正、村上泰興（Ｓ36）、山浦克典（前委員長、アドバイザー）

名簿委員会　○戸井田敏彦、西村和洋、東恭平、村上泰興（Ｓ36）、千葉寛（前委員長、アドバイザー）

事業委員会　○佐藤信範、櫻田大也、小林江梨子、山口直人（前委員長、アドバイザー）

会報委員会　○西田篤司、荒井秀、原田真至、佐藤弘子（Ｓ34）、加藤文男（Ｓ47）、角田範子（Ｓ52）、荒野泰（前委員長、アドバイザー）

（○印：委員長）

会報サイズ変更について

薬友会報は昨年の22号からＢ５版からＡ４版になりました。会員様からは、活字が大きくなり見やすい、内容が充実したとの声が多数寄せられました。薬友会委員会では、今後もみなさまのご意見を反映した親しまれる紙面づくりを心がけます。

訃　報

千葉大学名誉教授　日野　亨氏（83歳）は，平成24年８月23日（木）にご逝去されました。日野先生は昭和43年から平成６年まで26年間、薬品合成化学研究室教授として多くの学生の教育・研究をご指導されました。その間、薬学部長、評議員として薬学部の発展に貢献され、また日本薬学会の副会頭なども務められ、薬学の振興に寄与されました。これらのご業績に対し正四位が叙位され、また瑞宝中綬章が叙勲されました。

（西田　篤司）

第22回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日　時：平成25年７月13日(土) 13：00～17：20
（17：20～18：30：意見交換会）
場　所：千葉大学薬学部120周年記念講堂
（医薬系総合研究棟 II 期棟１階）
（〒260-8675　千葉市中央区亥鼻１- ８- １）
主　催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会
共　催：日本薬剤師研修センター（参加者には日本薬剤師研修センターより単位が認定されます。）
テーマ：「The　創薬　- 基礎から患者へ－」

・JR千葉駅、京成千葉駅到着後、JR千葉駅東口正面７番のバス乗り場から「千葉大学病院」行きバス、または「南矢作」行きバスに乗車、「千葉大薬学部前」で下車。約15分。

１）**「医薬品表示における科学的根拠に基づくデザインーデザイン心理学からのアプローチー」**
日比野　治雄 先生
（千葉大学大学院工学研究科デザイン心理学研究室 教授
／㈱BB Stoneデザイン心理学研究所技術顧問）

２）**「新しい病院薬剤師～IPEからIPWへ～」**
石井　伊都子 先生
（千葉大学医学部附属病院薬剤部 教授・部長）

３）**「細胞分化、増殖、がん化にかかわるNotchシグナルの働きとその制御」**
伊藤　素行 先生
（千葉大学大学院薬学研究院　生化学　教授）

４）**宮木高明記念講演: 「うつ病の病態とその成因並びに診断」**
鍋島　俊隆　先生
（名城大学薬学部 地域医療薬局学講座　特任教授、医薬品適正使用推進機構　理事長、
名古屋大学/ルーマニアアレキサンドル・イワン・クザ大学　名誉教授）

５）**意見交換会（懇親会・質疑応答を含む）**：医薬系総合研究棟II期棟 大会議室（記念講堂の階下）

セミナー参加費　1,500円（事前予約）　2,000円（当日）
意見交換会（懇親会）参加費　2,500円（事前予約）　3,000円（当日）
参加申込み方法　同封または郵便局備え付の払込書にて下記の郵便振替口座に参加費を送金ください。
払込書の通信欄に、氏名、住所、卒業年度を必ずご記入ください。
［事前予約締切：平成25年７月２日（火）］
郵便振替口座：00150- 5 -551796　千葉大学薬友会

本セミナーに関するお問い合せは薬学研究院（臨床教育研究室）　佐藤信範までお願いいたします。
（電話/FAX：043-226-2910、　E-mail：nobu@chiba-u.jp）

生涯教育セミナーへのご招待：本年度は薬学部卒業後35年の1978年（昭和53年）３月、卒業後45年の1968年（昭和43年）３月に卒業された方々をご招待いたします。該当されます皆様は、当日受付係にお申し出ください。
薬学部見学のご案内：卒業生と一緒に参加される小・中・高校生および大学生については参加費無料といたします。また、ご希望があれば医薬系総合研究棟 I・IIをご案内いたしますので、事前にお申し込みください。この機会に是非母校に足を運ばれ、新棟が建つ亥鼻キャンパスで旧友と久しぶりの一時をお楽しみください。
一般参加者のご来聴：卒業生のみならず一般の参加者も歓迎いたしますので、奮ってご来聴ください。

編集後記

薬学部が亥鼻キャンパスに全面移転してから早くも１年半が過ぎました。新しい建物での教育･研究もようやく落ち着きを取り戻してきたように思います。亥鼻の地に薬学部･薬学研究院の力を結集した新たな取り組みも芽吹きつつあります。グローバル化に対応する取り組みや入試制度の改革、寄付講座の開設などをお伝えしました。薬友会員の皆様のご支援をお願い申し上げます。
ご寄稿いただきました皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げます。　（西田　篤司）

薬友会報23号編集委員会
西田　篤司（委員長）、荒井　　秀、原田　真至、山本　恵司（次期委員長）、森部久仁一、東　顕二郎、
小川　通考（S34），加藤　文雄（S37）、角田　範子（S52）、荒野　　泰（前委員長）